全国世界水の偉人覚醒顕彰祭

嫁ヶ島万燈会

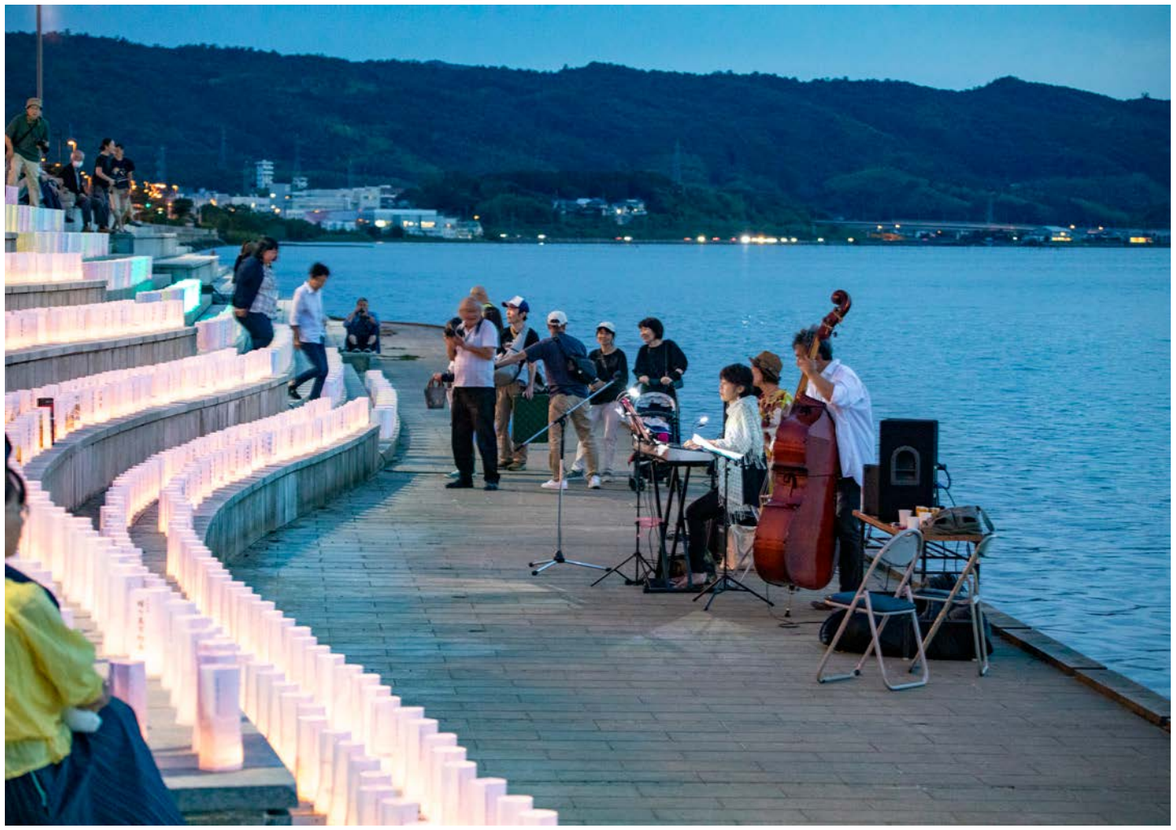
2023 . 9 . 23

宍道湖夕日スポット

No 40

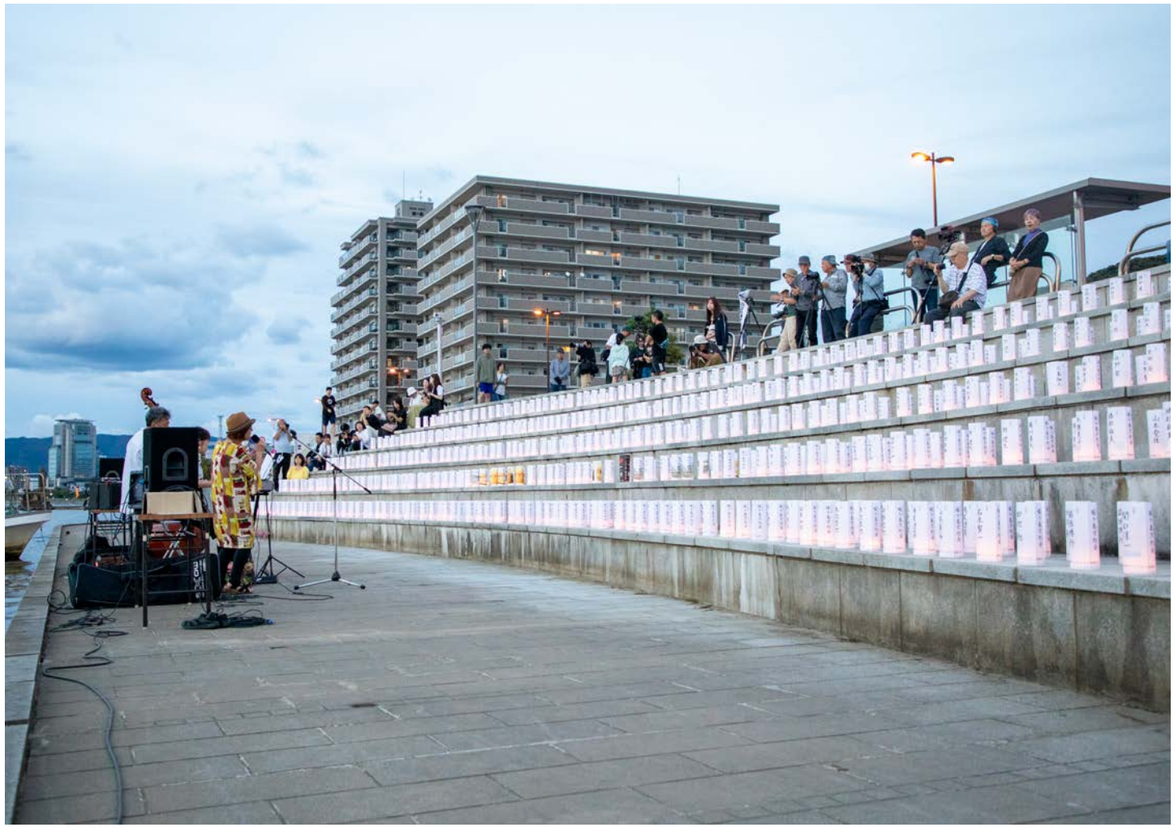
人間自然科学研究所

YAMAHA
mo X6



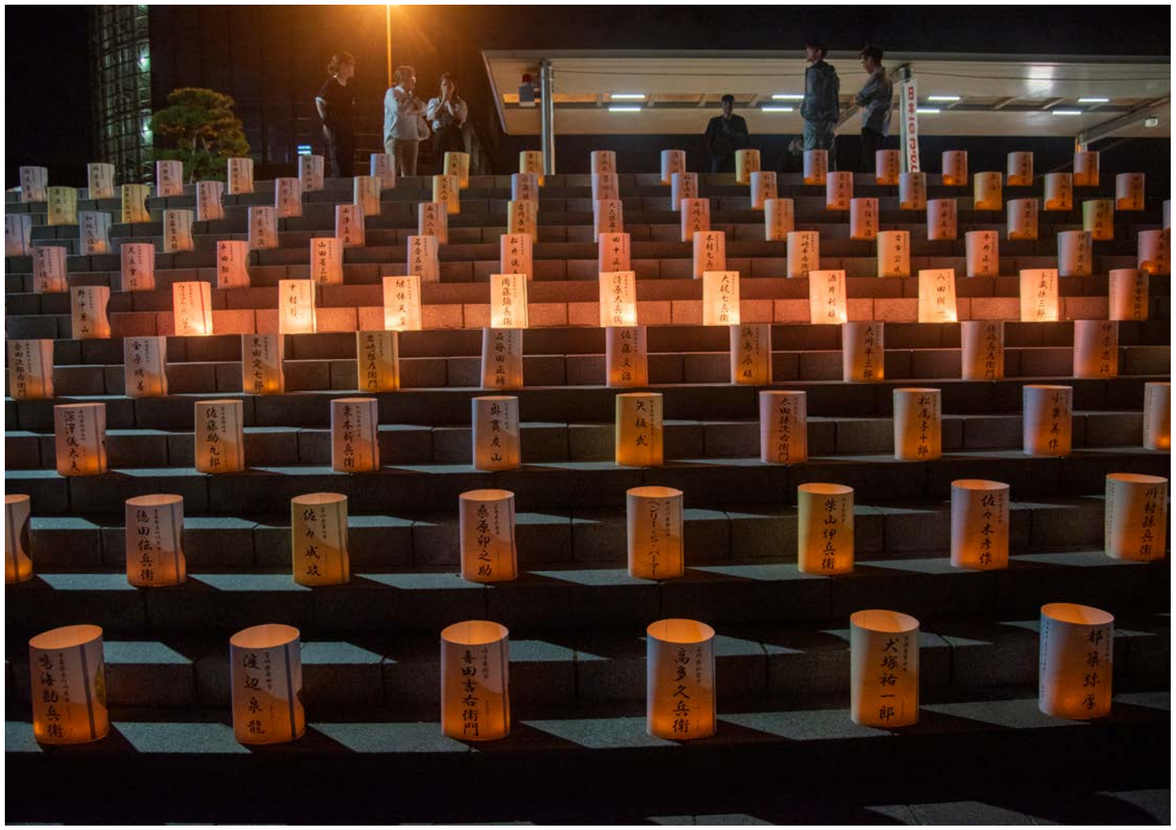
松本純子

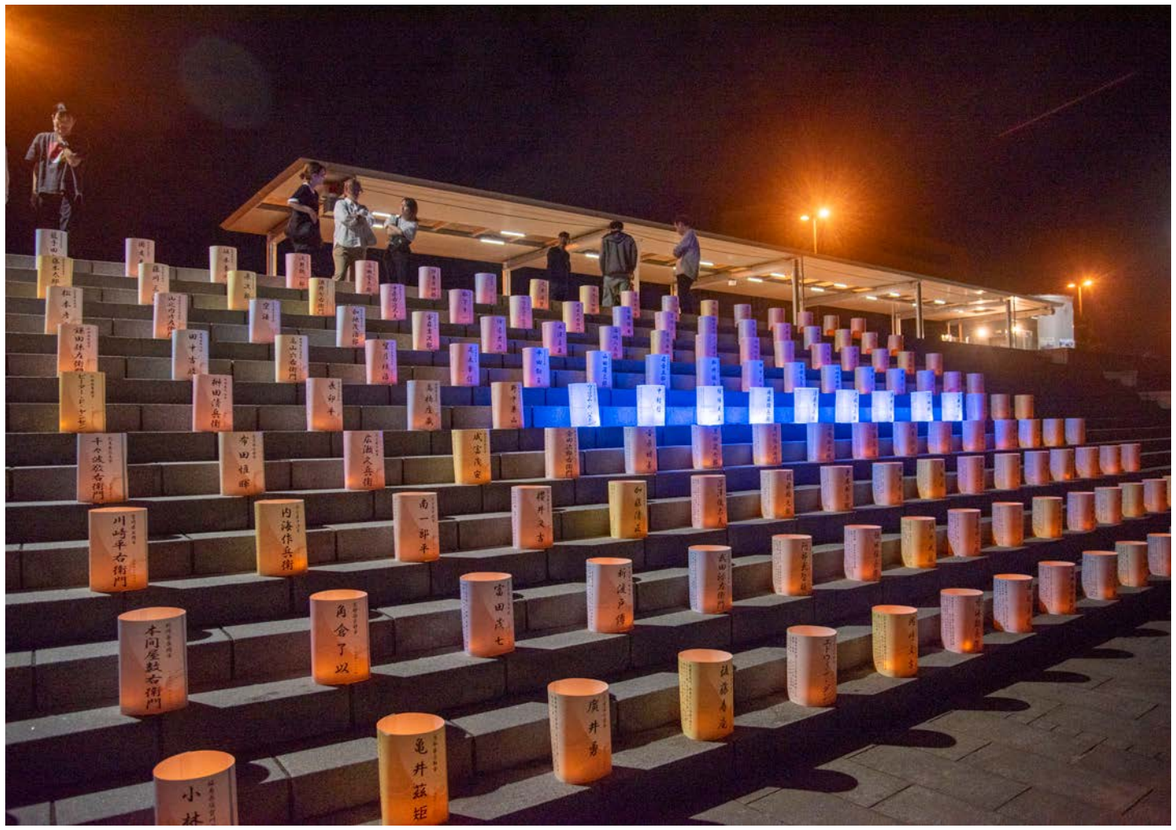
永田茂衛門
色川三郎兵衛
井澤弥惣兵衛
中賀百工
卯南丈作

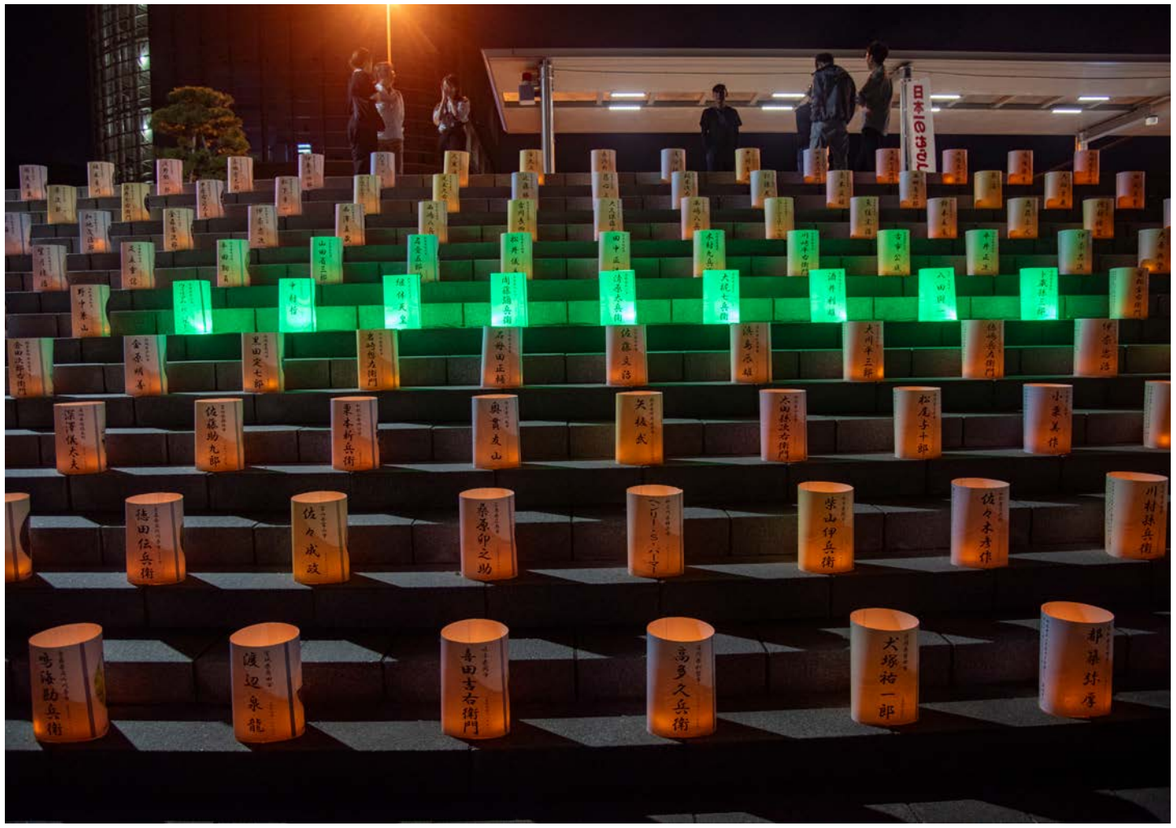


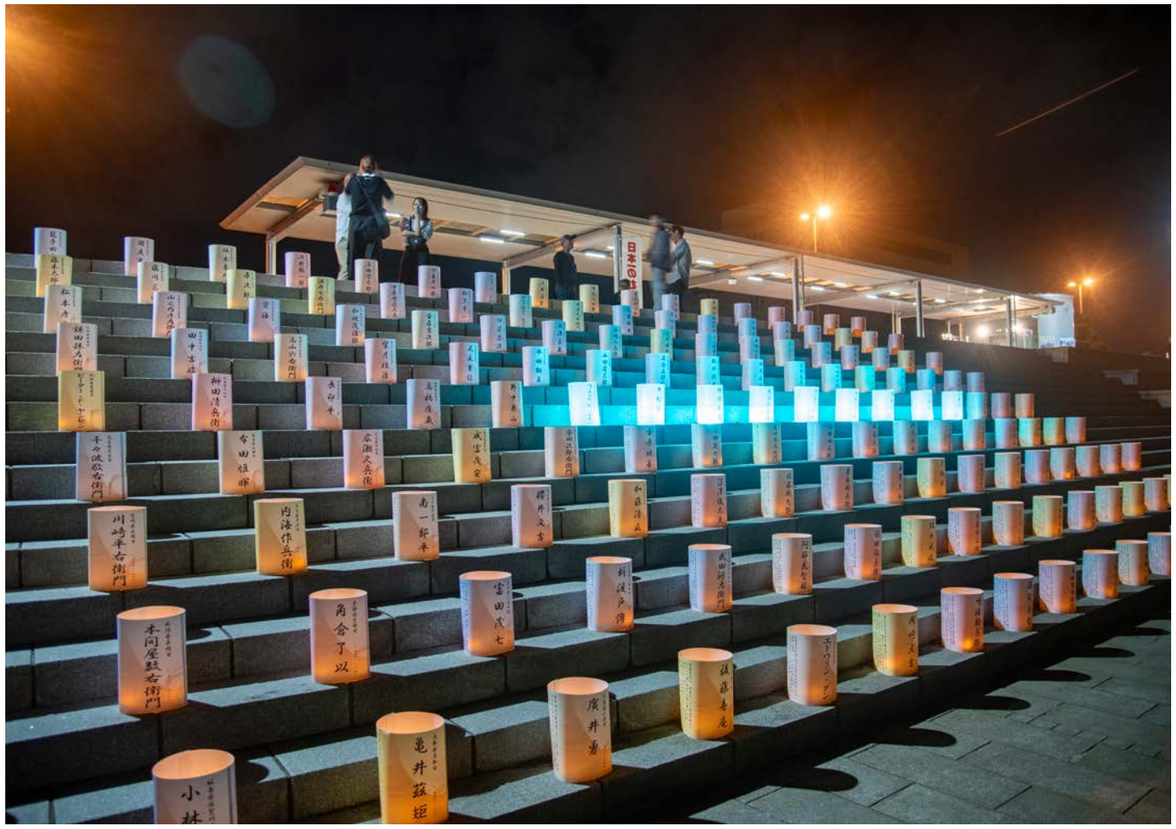
田信玄
須田滅太郎
小野口仁蔵
古賀百工
印南文作

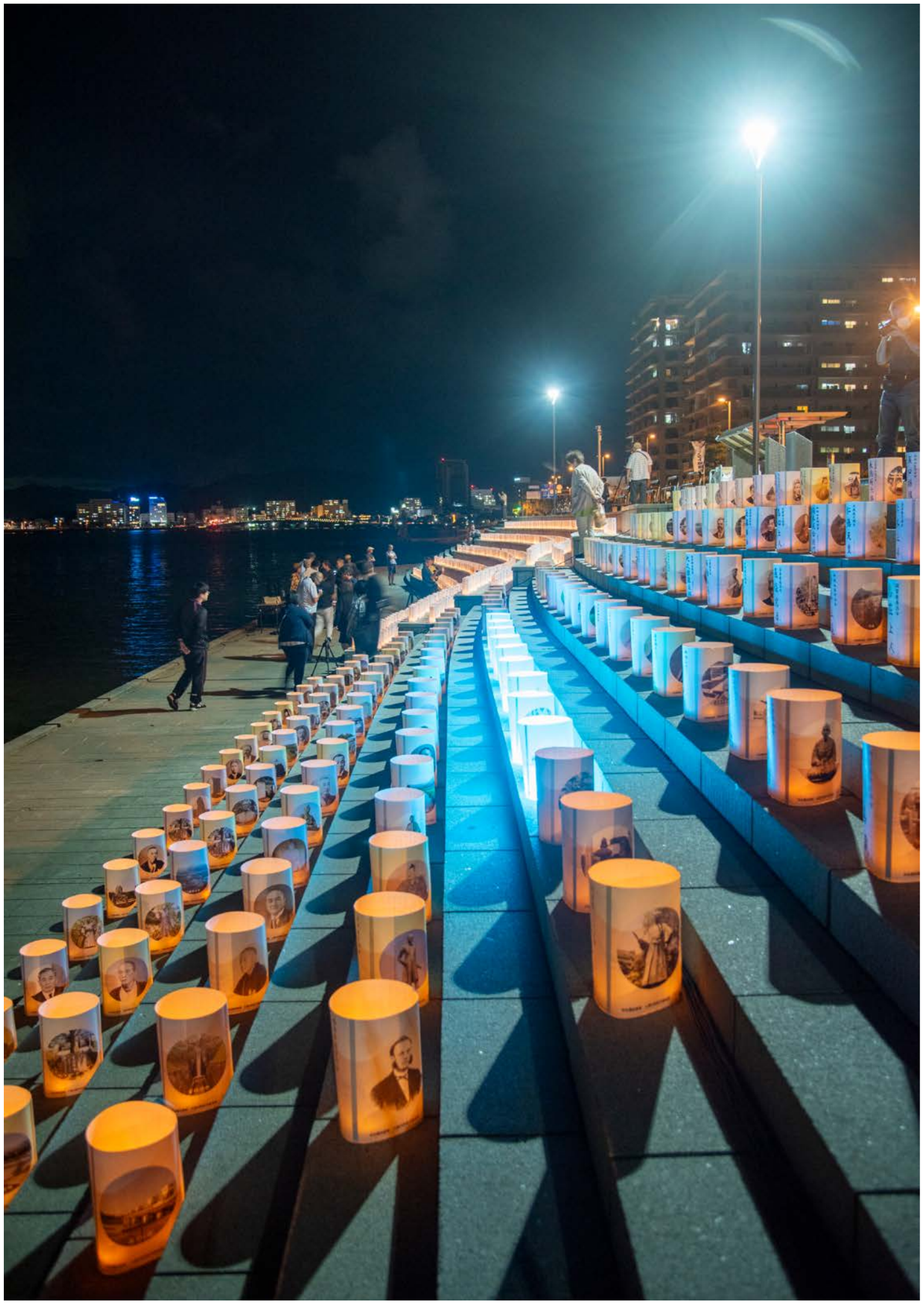
平右衛門
海作兵衛
南一郎平
推名道三
本間屋數右衛門
角倉了以
小林久敬

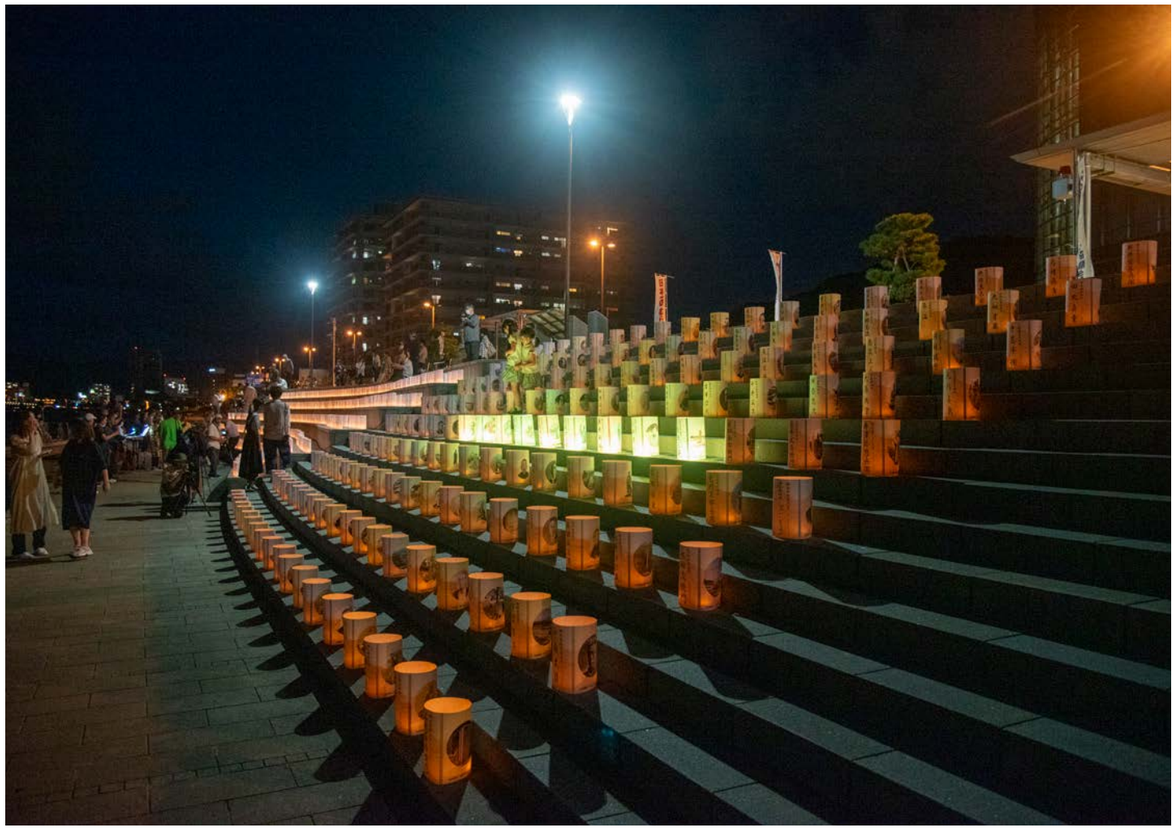


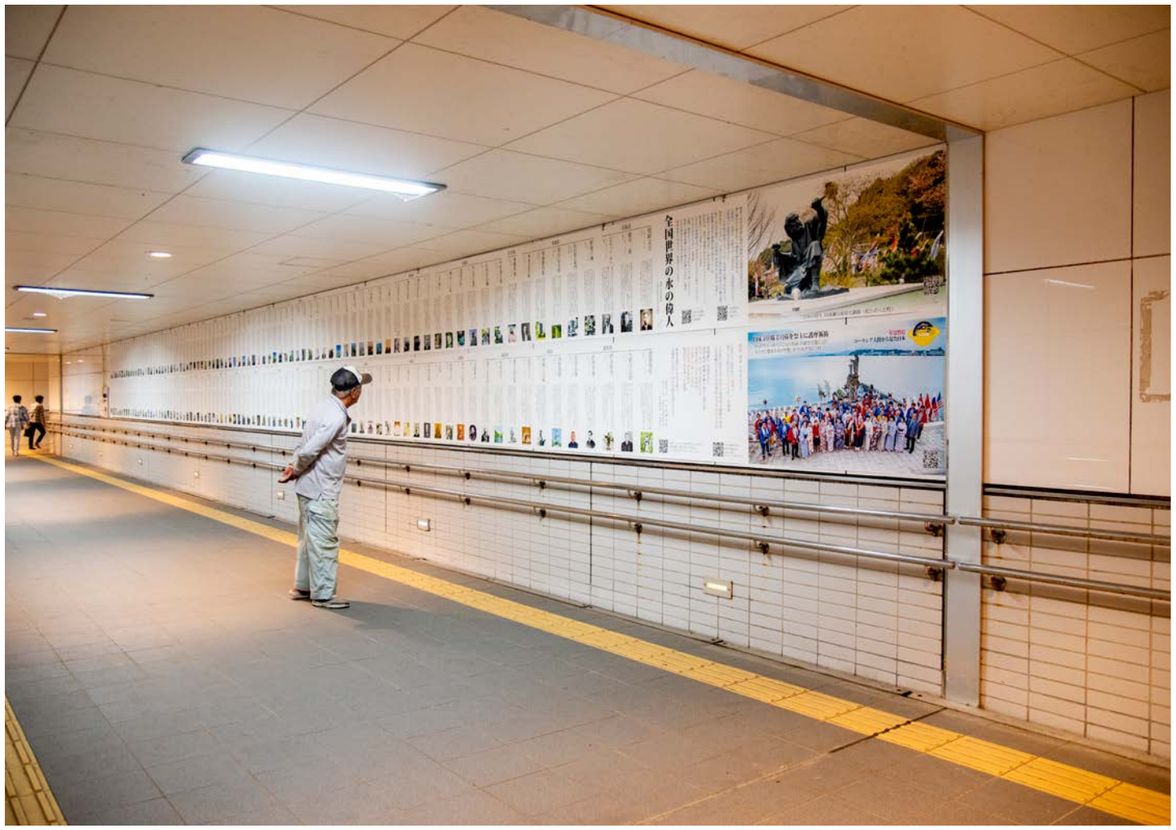











全国世界の水の偉人

岐阜県
酒井七右衛門
山田省三郎
平田靭負
柴山伊兵衛
林幽関
福井県
喜田吉右衛門
渡辺泉龍
酒井利雄
継体天皇
石川県
高多久兵衛
佐藤助九郎
佐々成政
富山県
高田雪太郎
浅野総一郎
宮崎県
黒木七左衛門
田丸貞重
宮田盛儀
坂元源兵衛
藤江監物
大分県
内海作兵衛
広瀬久兵衛
熊本県
櫻井又吉
富田茂七
千々波敬右衛門
布田惟暉
加藤清正
長崎県
倉田次郎右衛門
深澤儀太夫

埼玉県
永田茂衛門
原次郎
大川平三郎
伊奈忠治
見川喜蔵
伊奈忠次
田口清平
白井武左衛門
奥貫友山
栃木県
井澤弥惣兵衛
矢板武
印南丈作
福島県
小野口仁蔵
小林久敬
岡山県
咽声忠左衛門
河原善右衛門
石川善右衛門
津田永忠
島根県
清原太兵衛
ト蔵孫三郎
周藤彌兵衛
鳥取県
大梶七兵衛
亀井茲矩
和歌山県
平井正次
鈴木立庵
栗本新兵衛
柏木浅右衛門

治水の偉人　周藤彌兵衛翁大銅像（松江市八雲町）

継体天皇が五世紀に湿地の開拓の大規模な治水を行い
実り豊かな土地となった越前平野を流れる
九頭竜川　足羽川　日野川の三大河川に、北陸農政局による
九頭竜川下流農業水利事業として
二〇一九年総合管理システム やくも水神 が導入されました。
同年四月二十九日に、日本の火の源の神社 熊野大社 鑽火殿で
起こした火を頂き、岩坂御陵 神魂神社 剣神社 切通し
周藤彌兵衛翁大銅像を結ぶ聖火リレーを
八雲ゆう人会の鯉のぼりとあわせ開催。
同年四月、東京で開催された日本ビジネスインテリジェンス
協会東アジア友愛フォーラムを経て
七月に中華農耕文明の発祥地とも言われる楊凌・西安から
対立から共生の文化へ を発表。
以降、毎年百七十二名の全国世界の水の偉人をたたえ
名前・功績を記載した千個の灯籠に火を灯し顕彰。
日本の縁結びから世界の縁結び へ
健康 環境 平和はひとつ を発信しています。

松江 63 連隊
松江工業高校
陸軍墓地

全国世界の
水の偉人
功績リスト

健康 環境 平和はひとつ
八雲立つ出雲から 和議 で
対立の文明から共生の文化へ を提唱
3大核大国がぶつかる 日本列島と朝鮮半島は
人類覚醒のさきがけを務める 世界縁結びの地
地球誕生 地政学から
創造 繁栄 破壊 を繰り返す人類史を
戦前 戦中 戦後 責任に分け
未来を拓く 国是 を研究
宍道湖 中海 大山圏は
国民国連 が生まれる
特別な天命を担った地域
資本主義から 智本主義へ
正義から道理へ 歩いた後に道ができる

創業五〇年　小松電機産業
設立三〇年　人間自然科学研究所
会長兼社長　小松昭夫

全国のコミュティ FM120 局以上を結んで
毎週日曜日の朝 7 時から生放送
ラジオおはようサンデーダイジェスト

日本の縁結びから
世界の縁結びへ
正義から道理へ
歩いたあとに道ができる

北海道

岡崎文吉
一八八一年～一九一八年
石狩市

近代日本の河川治水は捷水路方式を基本としてきましたが、岡崎の唱えた「自然主義」に基づく治水方式は近年の環境保護思想とともに再評価され千歳川河川整備計画に盛り込まれました。岡崎式河川補修の基礎技術の単床式ブロックは、石狩川河口付近の補修に採用され、またミシシッピ川流域の護岸工事にも使われています。

廣井　勇
一八一七年～一九四五年
小樽市

広井勇博士は防波堤に当たる波の強さを測定し、防波堤に使うコンクリートの性能を試験し、日本初のコンクリート製の外洋防波堤を建設しました。小樽港の成功によって日本の近代港湾の整備が進みました。そのことから、小樽港の防波堤、特に北防波堤は重要文化財と同じくらいの価値を持つと評価されています。

エドウィン・ダン
一八〇九年～一八八〇年
札幌市

真駒内牧牛場における水の安定供給のために建設を提案し、一八七九年に完成した真駒内用水は、のちに水田の灌漑用水としても利用され、周辺地域における稲作の定着に大きく貢献した。北海道における畜産業の普及・発展に努め、酪農、乳製品・食肉の加工技術、大型農具を用いて農作業を行う技術などを伝えた。

青森県

新渡戸傳
一七九二年～一八七一年
十和田市

「三本木原台地」と呼ばれた十和田市中心は荒れ野原、この土地の開拓に着手したのが新渡戸稲造の祖父、新渡戸傳。米の生産を安定させ農民たちの生活を救うため、奥入瀬川から水を引き、不毛の三本木原台地に二五〇〇ヘクタールの水田開発を計画。藩からの出資金のほか多くの出資者を募り傳の私財も充てられました。

武田源左衛門
一六五二年～一七二一年
五所川原市

江戸時代の奉行だった武田源左衛門は、五所川原堰の工事担当を命ぜられ藤崎村から五所川原村まで、長さ一八二四間、幅平均二間半の堰を開通させたほか金木新田の開拓や治水に大いに力を振るい数々の功績を挙げました。武田源左衛門にちなんで武田村と名付けられた地域は武田地区と呼ばれるようになりました。

徳田伝兵衛
一六八二年～一九二六年
石狩市

徳川中期。金木新田開拓の功労者。元禄一一年（一六九八年）より、水利関係の奉行として、長さ一三八一間（約二・二キロ）の川倉川、ならびに、長さ二二一〇間（約四キロ）の才ノ神川開削を指揮しました。また藤枝溜池を造成するとともに、岩木川の堤防築造などにも尽力しました。

鳴海勘兵衛
生年不詳～一七二三年
五所川原市

津軽信政から藩の直営工事の開発派立頭（指揮者）を命ぜられ、五所川原新田の開拓に成功し、五所川原造初代の代官となりました。また、板屋野木（北津軽郡板柳町）の蔵奉行にも任じられました。
続いて、金木新田の開拓にも尽力し、藤枝溜池（金木町）の築造に協力し、岩木川堤防の建設にも努力しました。

宮城県

片平観平
一七七〇年～一八四一年
白石市

観平は、大雨のたびに水害に苦しむ白石の人々を救うため、私財を投げ打って治水工事を行いました。大堰に頼らずに白石川からの水を引くための隧道を掘り、年月をかけ苦難を乗りこえて「蔵本大堰切通トンネル」は完成しました。現在も地元白石の人々は、これを「切通（きんとし）」と呼んで大切に利用しています。

ピーター・F・ヤンセン
一九〇二年～一九八一年
男鹿市

オランダ技術コンサルタントおよび世界銀行顧問として国際的な活躍を展開。特に八郎潟については昭和二九年、現地を視察して干拓計画の概要とその有利性を説いた「日本の干拓についての所見」を政府に提言し、さらに数次にわたる来日指導によって事業の進展に貢献した功績は大きい。

秋田道

榊田清兵衛
一八六四年～一九二九年
大仙市

最上川に合流していた赤川は、大雨のたびに水害をおこしていた。田んぼをつぶして赤川の川幅を広げようという計画が考えられた。農家の人は田んぼをなくしては困る。という話しを聞き田んぼをつぶすかわりに砂丘をほって、最上川と赤川を切りはなす治水工事を政府にねがい出て、新しい川の流れをつくる工事が始まった。

鎌田孫左衛門
一七九三年～一八七一年
十和田市

「三本木原台地」と呼ばれた十和田市中心は荒れ野原、この土地の開拓に着手したのが新渡戸稲造の祖父、新渡戸傳。米の生産を安定させ農民たちの生活を救うため、奥入瀬川から水を引き、不毛の三本木原台地に二五〇〇ヘクタールの水田開発を計画。藩からの出資金のほか多くの出資者を募り傳の私財も充てられました。

石川理紀之助
一八四五年～一九二五年
潟上市

石川理紀之助は、明治時代の農村指導者で「老農」と敬称され、「寝ていて人を起こすことなかれ」の言葉を残したことでも知られています。「老農」とは、在来の農法を研究し、これに自らの体験を加えて高い農業技術を身につけた、農業熱心家の人のことを言います。
石川理紀之助は、その老農の代表的な人物です。

上杉鷹山
一七五一年～一八二二年
米沢市

一七歳で藩主となり、厳しい藩の財政再建、人々を豊かにする事業に取り組みました。大倹約令と一緒に行ったのが農業開発です。上杉鷹山は安永元年（一七七二年）、中国の成功例を真似ました。
遠山村で藩主が自ら田を耕す「籍田の礼」を行い、農業の尊さ、大切さを、身をもって示しました。

阿部永作
一八五四年～一九二七年
酒田市

北俣村一〇〇年の大計をたてるには、水源林の育成にあると考えた。明治維新後、薪炭材料に奥山の雑木を乱伐し、水源林の重要さを説いても耳を傾ける者は少なかった。これを説得し、一五年間雑木の伐採を厳禁し、水源林の育成に努めた。二七〇〇町歩の水源林は守られ、北俣村の洪水は少なくなり、田も水で潤うようになった。

岩手県

阿部武智雄
一八六二年～一九二三年
五所川原市

岩木川改修の恩人。県会議員時代から津軽の生命線である岩木川の改修事業実施に奔走、明治三三年軽一市四郡の県会議員、市町村長、貴衆両院議員ほか有力者に呼びかけ岩木川改修期成同盟会を結成、自ら会長となって政府並びに両院に陳情し、ついに五〇有余年後の今日まで続けられている一大事業をもたらしました。

後藤寿庵
一五七七年～一六三八年
奥州市

後藤寿庵は、水不足により砂漠の様だと言われた地に、西洋の技術を取り入れ胆沢川から水を引き上げる「寿安堰」を造り、豊かな穀倉地帯の礎を築きました。大正三年、治水の功により従五位が贈られました。昭和六年には壽庵の館だった跡に寿庵廟堂が建てられ、毎年九月一一日には寿庵祭が行なわれています。

川村孫兵衛
一五七五年～一六四八年
石狩市

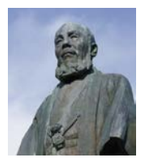
近代日本の河川治水は捷水路方式を基本としてきましたが、岡崎の唱えた「自然主義」に基づく治水方式は近年の環境保護思想とともに再評価され千歳川河川整備計画に盛り込まれました。岡崎式河川補修の基礎技術の単床式ブロックは、石狩川河口付近の補修に採用され、またミシシッピ川流域の護岸工事にも使われています。

石母田正輔
一八八一年～一九四一年
石巻市

百年ほど前の角田市周辺は、阿武隈川が流れているものの、川よりも土地が高く水田に水を引くことができないため、小さな沼や溜池に頼っていましたが水量が少なく米を十分に作れませんでした。阿武隈川からの取水計画実現を先頭に立って成し遂げた高山善右衛門は、この功績により高山上水翁と呼ばれています。

高山善右衛門
一八六三年～一九一八年
角田市

江戸時代後期の老農、農業指導者、農業経営者。一七九二年、足軽の子に生まれた渡部斧松は、久保田藩において、寒風山山麓の滝の頭湧水から水路を掘削した鳥居長根の開墾や、渡部新村の経営をはじめとして、久保田藩の水利、開墾、救済、殖産等の各事業において、多大な功績を遺しました。



渡部斧松
一七九二年～一八五六年
男鹿市

鎌田三之助「わらじ村長」はわらじを履いて村内を巡回した為、村民から「わらじ村長」と呼ばれ親しまれた。特に鎌田三之助が力を入れた事は品井沼干拓事業で、昔は数年に一度、大雨で吉田川などが氾濫し、村民は大変困っていた。それを現在の品井沼のように水害につよくしたのが鎌田三之助です。

鎌田三之助
一八六三年～一九五〇年
大崎市

宮城県

石塚綱吉
一八六七年～一九四六年
酒田市

灌漑で畑を田に変えることで生産力を増大し、貧しい村を更生させ豊かにしようと決意。それには動力揚水によって灌漑揚水を確保し、開田することに利便があると考え、活動を始め、同村地内に揚水機を設置しました。綱吉の熱心な働きで昭和九年当時、百町歩余の灌漑開墾事業に成功し荒れていた地は美田となりました。

佐藤文治
一八七〇年～一九三四年
酒田市

「佐藤氏紀功碑」の碑文に「佐藤文治氏奥井排水溝及赤川京田川堤防事業奏効以至今日多依氏之力我等慕其徳有志相謀建一碑石以表微意」とある。奥井排水溝と赤川、京田川堤防事業の完成が佐藤文治に負うところが大として、その徳を称えている。
文治はこの地方の治水に生涯をかけた人である。

佐々木彦作
一八一九年～一八八〇年
庄内町

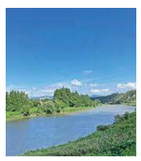
最上川下流左岸北部の一部では北舘大堰の恩恵を受けていたが、狩川・余目・大和・常万・新堀の村々は、昔から水利の便が悪く農民は干害に苦しんでいました。彦作は新しい堰を造る決意し計画に着手、最初の計画は失敗しましたが事業家吉田寅松によって彦作の夢が明治四三年八月実現し、九九〇町歩が開田されました。

木村九兵衛
一八五四年～一九三三年
鶴岡市

明治三〇年代の米作りでは水不足に悩まされていました。耕地整理や開田の需要は増大する一方、田植え前後や渇水期は各地で水争いが絶えず、九兵衛は電力を利用した灌漑「電力揚水機」の設置を発案しました。明治三十五年に矢馳揚水機組合を組織し湯尻川に揚水機場を設置しました。

梅津晴宗
一七六七年～一八四二年
酒田市

最上川川南の酒田市広野地区は昔ハンノキ谷地と呼ばれ大小多くの沼が点在していました。幾多の先人が開発を進めましたが洪水被害が度重なり、梅津春宗は佐藤世八郎等二二名の村民に諮り、溝、水門、沼を深くし貯水量を増やす計画を藩の許可を待たず遂行し約四二〇〇人の人夫と三年間の月日をかけ難工事を完成させました。



今野茂作
一八八年～一八八二年
酒田市

日向川の度重なる洪水によって寛永二一年にはその三分の二近くを失い、さらに下藤塚新田村、東野新田村のように洪水から逃れるために全村移転しているほどであった。日向川流域の村々を洪水から救うために、西山に新川を掘削して日向川を直接日本海に注ぐ工事を完成させたのが今野茂作である。

コルネリス・ファン・ドールン
一八三七年～一九三三年
須賀川市

オランダの土木技術者で、明治時代の政府や府県などによって雇用された外国人で 約八年間にわたって日本で河川・港湾の整備計画を立て、オランダ人土木技師のリーダーを務めた。携わった事業には、大きな成果を上げた安積疏水や、全面的な失敗に終わった野蒜築港などさまざま事例がある。

福島県

小林久敬
一八二三年～一八九一年
那須川市

須賀川は日照りが続き、稲が実らず農民は苦しんでいた。久敬は猪苗代湖から水を引き人々を救おうと考え猪苗代湖と岩瀬地方が見渡せる斉木峠にトンネルを通すことを考えたが、明治政府と県は別ルートで安積疏水の工事を行い完成した。後に久敬の情熱と見識が認められ、民間功労者としてその労をねぎらわれた。

小野口仁蔵
不詳
那須川市

安積疏水に功績を残した人物です。安積疏水は、古来より水利が悪く不毛の大地だった郡山の安積原野に、猪苗代湖から湖水を引いた一大事業です。
この安積疏水の開削は、明治一二年から始まり、日本で初の国直轄の農業水利事業となりました。郡山市周辺の農業に多大な恩恵をもたらしたことで知られています。

栃木県

印南丈作
一八三年～一八八八年
那須塩原市

那須野ヶ原は、那珂川、蛇尾川、箒川などによってつくられた複合扇状地で地下に厚く砂、小石が堆積し、雨や川の水はすぐに地下に浸透してしまい、水利に恵まれない原野であり、一日も早く水を引きたいと願っていた人々の生活のため、一日も早く水を引きたいと願っていた人々の中に「印南丈作」と「矢板武」がおりました。

矢板武
一八四九年～一九二三年
那須塩原市

明治から大正時代の開拓者、実業家。嘉永二年一一月一四日生まれ。明治一三年、印南丈作と那須開墾社を組織し、栃木県那須野ケ原の開拓、那須疏水の開削につくしました。三〇年栃木県会議員。下野銀行、矢板農場などを創立、また下野新聞社長を務めるなど多くの分野で栃木地域に多大な功績を残しました。

埼玉県

井澤弥惣兵衛
一六五四年～一七三三年
さいたま市

幕府は米を多く作るため八丁堤を切り開き、見沼ため井を田に変える計画を立てた。井澤弥惣兵衛はため井の代わりの用水を引くことにしたのが見沼代用水の始まりです。見沼代用水は利根川から取水し八丁堤まで六〇キロメートルも流れる長い用水です。弥惣兵衛はこの長い見沼代用水を引く工事を村人の協力で完成させた。

奥貫友山
一七〇八年～一七八七年
川越市

寛保二年、荒川・利根川が決壊して江戸時代最大の大洪水が発生。私財すべてを農民に拠出し率先して救助にあたり、自らの田畑を質入した金で食糧を買い続け一年に渡って窮民を救援し続け、最終的に一〇万人の命を救ったとされる。その後も、自費で水塚と呼ばれる植林を続け、幕府に防災策を言上し、治水や防災に尽力した。

白井武左衛門
江戸中期
志木市

用水に乏しい宗岡に野火止用水を引くため、交差する新河岸川に「いろは樋」という掛樋を架設した。この架設によって宗岡村の農業発展に寄与した。また宗岡村の洪水を防ぐため、東西の新河岸川堤と荒川堤を結ぶ北側の佃堤、南側の新田場堤を築造し、宗岡村の惣囲堤を完成させ、治水整備に尽力。

茨城県

須田誠太郎
一八八一年～一九六九年
潮来市

須田誠太郎は利根川豪雨水害によって母を失い、一生を治水対策にささげる決心をしました。その後新聞記者の肩書きを活かし利根川堤防、などを完成させるも洪水の被害は絶えず、私財を使い果たし水害対策に専念して利根川治水対策に努力しました。まさに利根川治水の父として一身をなげうっての事業でした。

色川三郎兵衛
一八四一年～一九〇五年
常陸市

維新後に政界へ進出し県会議員を経て、明治三三年に立憲改進党から立候補し当選し衆議院議員を二期務める。在任中には、鉄道会社に働きかけて日本鉄道海岸線（現常磐線）の敷設計画を変更させ、当時水害に悩まされていた土浦市の霞ヶ浦側に、線路の盛土を湖岸堤の代わりとして作らせるなど、水害対策に尽力した。

群馬県

田中正造
一八四一年～一九一三年
桐生市

明治時代初期の足尾鉱毒事件、渡良瀬川および利根川水系の水害に対して、その全生涯を反公害闘争と民衆救済のために捧げた政治家。
精力的な治水行脚を行い、水害の原因が渡良瀬川水源地域の森林の大量伐採、関宿の突堤と栗橋鉄橋の設置にあると喝破し、「近自然河川工法」の先駆となる。

千葉県

大原幽学
一七九七年～一八五八年
旭市

那須野ヶ原は、那珂川、蛇尾川、箒川などによってつくられた複合扇状地で地下に厚く砂、小石が堆積し、雨や川の水はすぐに地下に浸透してしまい、水利に恵まれない原野であり、一日も早く水を引きたいと願っていた人々の中に「印南丈作」と「矢板武」がおりました。

東京都

安松金右衛門
一八二一年～一八八六年
立川市

承応四年、玉川上水の用水路が計画され、安松金右衛門に工事を命じられた。小川村から取水し新河岸川まで八里を掘り通しわずか四〇日という短工期で野火止用水を完成させた。これにより野火止二〇〇石の地は二千石を産するようになり、完成後、大雨が降った翌日以降、用水を流れる水を見た農民たちは大喜びしたと言う。

古市公威
一八五四年～一九三四年
渋谷区

内務省土木局のトップとして全国の河川治水、港湾の修築のみならず、日本近代土木行政の骨格を作るとともに、工科大学長・土木学会長・工学会の会長として、日本近代工学ならびに土木工学の制度を作りました。
技術上・行政上に非凡の才能を振るい、近代土木界の最高権威とされました。

川崎平右衛門
一六九四年～一七六七年
府中市

武蔵国押立村（現在の押立町）で生まれ、地元府中周辺の多摩川大洪水の後の治水工事や六所宮（大國魂神社）の東照宮の修理などに尽力するとともに、多摩地域の発展の礎となった武蔵野新田の安定化や新田村々の救済・復興の立役者となる。世界遺産で有名な島根県大田市の石見銀山の経営でも活躍。

茨城県

永田茂衛門
生年不詳～一六五九年
常陸市

永田茂衛門とその子勘衛門は水戸藩の三大堰とよばれる辰ノ口 岩崎 小場の開設工事に従事し完成させた人物です。久慈川や那珂川という大河川に大規模な堰を築き水路を設ける大規模開発に着手します。
その指揮に当たった望月五郎左衛門が江堰開設のための技術者として目をつけたのが永田茂衛門父子でした。

埼玉県

原次郎
一八九五年～一九八八年
三芳野村

原次郎が生まれ育った集落は、入間川、越辺川の氾濫で水害に見舞われ、耕地が泥水につかり、農作物は半分、よくても七分ほど実ればいいという状態で貧しい村だった。「治水を図り、貧困をなくすこと」という強い決意を胸に、入間川、越辺川、小畦川の国の直轄改修工事河川に指定や、三川分流工事の実現など治水に尽力した。

大川平三郎
一八六〇年～一九三六年
坂戸市

日本の製紙王と呼ばれる大川財閥の創始者。
小畦川や越辺川は度々氾濫を繰り返し、明治四三年にも大洪水を引き起こしました。全額私費で地元の原次郎の協力を得て、約一キロメートルの堤防を建設しました。当時は大河でさえ国の河川管理は稀であり、今日それは「大川堤」と呼ばれています。

伊奈忠治
一五九二年～一六五三年
川口市

幕府に勘定方として出仕していた忠治は父、兄の仕事を引き継いで関八州の治水工事、新田開発、河川改修を行い、荒川開削、江戸川開削に携わりました。
江戸初期における利根川東遷事業の多くが忠治の業績であり、鬼怒川と小貝川の分流工事や下総国、常陸国一帯の堤防工事などを担当しました。

見川喜蔵
一七二九年～一八〇五年
春日部市

天明六年、関東は大洪水により飢饉となったが、自家用の米を出し地主を説得して米麦を供出させ、窮乏した農民を救済。水害を防ぐため自費を投じて五〇〇間の堤を築いた。その後再度洪水が襲ったが、戸毎に説いて盛り土を古堤の上に積ませ、二万石以上の流失を免れることができた。これが喜蔵堤と名付けられた堤である。

田口清平
一八三三年～一九〇一年
久喜市

若い時に利根川の洪水による被災をみて、治水に関する技術や知識を習得する。権現堂川の行幸堤（幸手市）の築堤にあたって、水利掛
として中心的な役割を果たした、明治天皇行幸の際に利根川治水の実情を奏上した。なお、清平が中心となって築堤した行幸堤は、現在は桜の名所となっている。

伊奈忠次
一五五〇年～一六一〇年
伊那町

埼玉郡粕壁宿（春日部市）の名主。
水害を防ぐために自費を投じて五〇〇間の堤を築いた。その後、再度洪水が襲ったが、戸毎に説いて土俵をつくらせ古堤の上に積ませた。昼夜の働きにより下流の田地およそ二万石以上の流失を免れることができた。これが喜蔵堤と名付けられた堤である。

大久保藤五郎
不詳～一六一七年
台東区

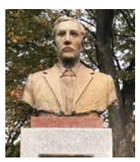
天正一八年江戸城下の上水工事の命を受ける。
その後、約三ヶ月で小石川目白台下の河流を神田方面に通し、これは後の神田上水の元となったとされている。
また、この功績により家康から「主水」の名を与えられたが、水が濁ることを嫌って「もんど」ではなく「もんと」と発音するように命じられた。

望月珪治
一八八三年～一九六九年
海老名市

望月翁は、昭和五年近郷七か町村を結合して相模川左岸普通水利組合を設立、管理者となり、十数年にわたるかんがい用排水改良事業の完成に尽力しました。
この事業により延長二〇キロメートル余りの水路、排水施設が完成し、二二〇〇ヘクタールの耕地が水害と干ばつから救われました。

ヘンリー・S・パーマー
一八三八年～一八九三年
横浜市

一八八三年来日し神奈川県より横浜上水道建設計画の依頼を受け多摩川取水計画と相模川取水計画の二案を県に提出して帰国。一八八五年に再来日し水道工事の全てを任されると水源を相模川支流の道志川とし野毛山配水池に至る総延長四八キロメートルの横浜水道建設を着工指揮にあたり日本初の近代水道を完成させました。



坂本養川
一七三六年～一八〇九年
茅野市

三島郡寺泊の豪商、大川津分水発願者。江戸幕府に対し分水建設を請願したが許可されず天保一三年には幕府も計画調査を実施したが莫大な費用及び周辺集落の反対により起工には至らなかった。明治維新後の一八六九年に、白根の庄屋田沢与左衛門らが分水工事を越後府に請願、ようやく分水工事を行うことが決定した。

本間屋数右衛門
一七一六年～一八〇一年
長岡市

最上川川南の酒田市広野地区は昔ハンノキ谷地と呼ばれ大小多くの沼が点在していました。幾多の先人が開発を進めましたが洪水被害が度重なり、梅津春宗は佐藤世八郎等二名の村民に諮り、溝、水門、沼を深くし貯水量を増やす計画を藩の許可を待たず遂行し約四二〇〇人の人夫と三年間の月日をかけ難工事を完成させました。

小栗美作
一六一六年～一六八七年
上越市

中江用水の開削は、寛文の大干ばつ後、関川から取水して別所川までの間をかんがいしていた「およべ川用水」を掘りつぐ構想を樹立しましたが、大普請のため続けることができませんでした。
そこで、美作が中心となり、藩営事業として一六七四年（延宝二年）工事に着手し、一六七八年に完成しました。

国友末蔵
一八八一年～一九六〇年
高田市

明治四十年、関川水系の落差を有効に使った名香山村蔵々の五〇〇キロワットの水路式発電所を建設。
国友の発電事業の中で特筆されるものは野尻湖の水を冬期間発電に用い雪融水を野尻湖に吸い上げる池尻川揚水発電所を建設したことでした。これにより発電と潅漑用水とも有効利用できるようになりました。

新潟県

太田孫次右衛門
一八五一年～一九二一年
妙高市

明治四年高田の医師瀬尾玄弘は四の辻の自宅で「知命堂」を開業しました。孫次右衛門は地域医療向上のため総合病院設立をめざす瀬尾に支援を行い明治二四年「知命堂病院」の創設に尽力しました。また、孫次右衛門は妙高市赤倉付近に土地を所有していたことから、地元の人々と連携し温泉の開発を行いました。

丸山豊次郎
一八六八年～一九三三年
高田市

新潟県上越市に生まれた丸山豊治郎は地元の住民間で長年続いた水争いの渦根を断とうと思い、川の水利権の確率を図るため尽力しました。また、一九三三年（昭和八年）四月には良質な飲用水を利用できるように地域の簡易水道の敷設に着工し、同年六月には竣工式を行いました。晩年を地元開発に取り組みました。

古川長四郎
一八九五年～一九四六年
直江津市

古川長四郎は、直江津の本砂山町（現在の中央四丁目）の廻船問屋に生まれ、佐渡商船株式会社の第四代目社長に就任。その後県会議員をつとめ、一九三二年（昭和七年）に佐渡汽船株式会社を設立した。
一九四二年には直江津町長に就任し、直江津港修築工事期成同盟会を結成、直江津港の発展に尽力した。

松尾与十郎
一八三三年～一八八六年
三条市

片口村の旧庄屋に生まれた与十郎は、水害の惨状を目の当たりにし、人々を守るには五十嵐川の堤防以外無いと決意、当時堤防をつくることに反対していた五十嵐川の北側の人たちを説得し、南側の堤防をつくる許可を出しました。与十郎は県から補助金が出なかったため、私財を使い堤防をつくりはじめ明治九年に完成しました。

椎名道三
一七九〇年～一八七五年
滑川市

道三は、厳しい山村で育ったため「農地さえあれば」と、土木・測量の技術習得に励み、一四歳のとき、少しの面積であったものの、村の谷川を流れる水を集めて開田し、世間で評判になったといわれています。
道三が生涯に開田した面積は一二〇〇ヘクタールに達し多くの農民を貧困から救いました。

ヨハネス・デ・レーケ
一八四一年～一九二二年
富山市

明治二四年七月、大雨災害の折、常願寺川流域も安政の大水害に次ぐ災害となりました。県知事は国に専門技師の派遣を要請デ・レーケが同年八月六日富山に到着し九月二日石川県へ出発するまでに常願寺川を始め黒部川、片貝川、上市川、庄川、神通川の各水系と伏木港を視察し治水計画を立てました。

伊東彦四郎
一七五八年～一八三四年
黒部市

加賀藩に黒部川からの用水開削を請願し一七九六年、十一代藩主・前田治脩から財政援助を得ました。
しかし、水路をつくる右岸は断崖絶壁で測量機械の無い時代、彦四郎は工夫し提灯の灯りを利用し夜、岩壁に登った人夫に、対岸から提灯の上げ下げを指図して、岸壁に印をつけさせて測量を進めました。

富山県

浅野総一郎
一八四八年～一九三〇年
衝波市

日本セメント産業の創設者で、後の浅野財閥の総帥。一八九八年に浅野セメント合資会社を設立し、多くの関連事業を設立した。鶴見一川崎間の遠浅の海岸を埋立て、大工業地帯を造成し製鉄所、造船所も設立。
日本で初めてとなる耐震設計理論を取り入れた小牧ダムを作ったことで周辺地域の開発が進んみました。

高田雪太郎
一八五九年～一九〇三年
富山市

明治二四年の大洪水により大きな被害を被った際、富山県知事は、常願寺川改修の必要性を痛感し政府に要請。政府はデ・レーケを派遣した。デ・レーケは県内各河川の調査を行い、そのほとんどに雪太郎は随行し記録を残した。そして基本計画を作成しデ・レーケの指導の下、雪太郎が施工することとなった。

佐々成政
一五三六年～一五八八年
富山市

戦国時代、常願寺川はたびたび氾濫し、水害が起こっていた。佐々成政は治水に取り組み「佐々堤」の築造や、いたち川の改修を行なった。常西用水路の川底には成政が造った石堤の跡が現在も残っている。
また、佐々成政は治水工事につきものだった人柱を禁じて、代わりに自身の名前を書いた石を埋めるようにした。

佐藤助九郎
一八四七年～一九〇四年
衝波市

富山県西部を流れる庄川は幾度となく川の氾濫による水害に苦しめられていた。助九郎一六歳のときに佐藤組を起こし常願寺川の川工事を請け負うがその後何度も洪水をくりかえした。明治二四年の常願寺川大洪水の工事の際に、内務省付属のオランダ人技師デ・レーケを招聘して指導を受け、見事に工事を成功させた。

石川県

高多久兵衛
一八五一年～一九〇七年
加賀市

石川県令はルクセンブルグの耕地整理を模範とし田区改正を行うよう久兵衛に依頼しました。久兵衛は上安原村の地主に説明したが費用がかさむことから反対された。以前から用水路改修を行うなど農業改良に熱心だった久兵衛はあきらめず工事費用の一時立て替えや所得補償を約束することでようやく承諾を得て着工した。

福井県

継体天皇
五〇七年～五三一年
坂井市

継体天皇は、大規模な治水を行い九頭竜川・足羽川・日野川の三大河川を造ることで湿原の干拓に成功した。これにより越前平野は実り豊かな土地となり、人々が定住できるようになった。
河川の整備に続いて港を開き水運を発展させることで稲作、養蚕、採石、製紙など様々な産業を発達させた。

酒井利雄
一八九一年～一九八九年
坂井市

土木工事を主とする会社を創立した酒井利雄氏は、坂井郡八千町歩の用水取入口であった鳴鹿大堰所の改良工事を計画、戦争で中断したが、戦後、昭和二二年国営九頭竜川沿岸農業水利改良事業を五ケ年計画で施工。
二四年より本格的に着手。そして二八年に待望の通水となり、翌年に竣工した。

富山県

金森吉次郎
一八六四年～一九三〇年
木曽三川水系

明治二九年に大洪水が西濃地方を襲い、一命を捨てる覚悟で村人を集め堤防を切り割り、輪中内にたまっていた水を揖斐川へ放出。結果、八〇〇〇戸の家屋と四万人の人命を救うことになる。
大正二年には、洪水の恐ろしさを広く世間に知らせようと明治二九年の浸水位を礎石に刻み洪水標とした。

岐阜県

金原明善
一八三三年～一九二三年
浜松市

明治一〇年全財産献納の覚悟を決めた明善は内務卿大久保利通に築堤工事実現の為に謁見した。明善自身も一介の田舎農民が内務卿への謁見は叶わないと思っていた。ところが快く大久保利通との謁見は実現した。
それは長年、誠実一途に天竜川の治水工事に奔走している明善の話が大久保利通の耳に入っていたからである。

名倉五郎助
不詳
掛川市

西大渕村から、今沢新田にかけての田畑は水の便が悪く、時に水争いもありました。水不足により育った稲が枯れるなど苦しい生活から人々を救うために坊主渕川の水を田畑に引き入れるための川底を通る地下水路を造り、百ヘクタールに及ぶ広大な田畑に水を引き人々の生活を支えるための工事を始めた。

中条右近太夫
不詳
菊川市

右近太夫は、干ばつ被害に困窮していた嶺田地区に隣村の奈良渕から水を引こうと計画、用水の建設を幕府に直接訴えました。幕府は建設を認めたものの領主を飛び越えて幕府に直接訴え出ること厳しく禁じられており右近太夫は処刑されました。死後に井の宮神社に祀られ、井宮様と呼ばれ地域の方から信仰を集めました。

松下幸一
一八九四年～不詳
菊川市

「菊川」大雨が降ると頻繁に洪水を起こす暴れ川でした。菊川を洪水の起きない川にすることを一生の仕事と決意した幸一は水害の改修費用の援助の為国や県へ嘆願また自分の田んぼを売っては上京し国への嘆願を続けました。結果、菊川は一級河川として認められ、昭和八年堤防改修工事が始まりました。

黒田定七郎
一八六一年～不詳
菊川市

菊川や牛渕川などの支流は、農業に欠かせない水を与えてくれる一方で、度々水害を起こし、その都度大きな被害を受けていました。
定七郎は、治水問題に精魂を傾け、養父源五郎の意思を継ぎ、河川改修運動に同士を集結、先頭に立ち、菊川の堤防を改修することに全力を注ぎました。

本間賢三
不詳
牧之原市

たびたび氾濫する坂口谷川の拡幅を行い、大井川から水を引き、干ばつに備えて水路を作るため、村人を説得し集めた資金で拡幅工事は明治四年に完成。
大井川から水を引く工事は、長さ三〇〇メートルの隧道工事が必要であり当時は困難と多くの費用が掛かったが私財を投じて工事を続け、明治九年に完成した。

静岡県

犬塚祐一郎
不詳
磐田市

天保の大飢饉の二年前、中泉代官所（現磐田市）に幕府の役人として赴任。この地は土地が低く洪水地帯であったが、この地の水を流す排水路（蝦島水迫）を造り、悪夢だった毎年の水害から人々を救った。
また、天竜川に大堤防を造り、河川敷の新田開発や両岸の水防組合設立など大きな業績を残した。

愛知県

都築弥厚
一七六五年～一八三三年
安城市

明治用水は矢作川用水の水源とし愛知県安城市を中心に八市にまたがる約八〇〇〇ヘクタールの農地を灌漑する農業用水です。この地域は小規模な水田が開かれていましたが農民は常に水不足に悩まされていました。
矢作川の水を碧海台地に導いて大規模な新田開発を計画したのが和泉村の都築弥厚翁でした。

久野庄太郎
一九〇〇年～一九九七年
知多半島

愛知用水は、水に苦しむ知多半島のため昭和三二年から始まったプロジェクトです。 御嶽山に牧尾ダムを造り、木曽川から水路を引いて知多半島を潤す、その後の高度経済成長の先駆けともなった大事業でした。
知多半島の農民としてその夢の用水の実現に命をかけてきたのが久野庄太郎翁と同士・浜島辰雄氏でした。

伊奈忠次
一五五〇年～一六一〇年
犬山市

徳川家康の命令を受け洪水の被害を減らすために犬山から弥富にまで続く御囲堤五〇キロメートルを造る。伊奈備前堤とも呼ばれる。
「伊奈流」と呼ばれる洪水対策の堤防システムは幕府の基本方となる。 他に木津用水の開削にも関わる。
これにより広い範囲に水を送ることが可能となる。

西澤真蔵
一八四四年～一八九七年
豊田市

西澤眞蔵は、弘化元年に愛知郡野々目村に生まれ、商人として各種の事業を手がけ大きな成功をおさめました。
その後、水不足に悩む愛知県の高岡地区や猿投地区（現在の豊田市）で進められていた枝下用水の開鑿工事に関わり、全財産を投げ打ち、膨大な借金を背負い、人生をかけて枝下用水を完成させました。

浜島辰雄
一九一六年～二〇三年
知多半島

愛知用水は、水に苦しむ知多半島のため昭和三二年から始まったプロジェクトです。 御嶽山に牧尾ダムを造り、木曽川から水路を引いて知多半島を潤す、その後の高度経済成長の先駆けともなった大事業でした。
知多半島の農民としてその夢の用水の実現に命をかけてきたのが久野庄太郎翁と同士・浜島辰雄氏でした。

三重県

河村瑞賢
一六一八年～一六九九年
淀川水系

元和四年二月生まれ。江戸時代前期の商人で海運と治水の功労者。 漬物屋から土木建築業に転じ、明暦の江戸大火では材木の買い占めで利益をあげました。
鉱山や新田の開発、東廻航路・西廻航路の整備、淀川治水のための安治川開削などの事業を手がけ大貢献し旗本にとりたてられました。

京都府

角倉了以
一五五四年～一六一四年
京都市

朱印船貿易の開始とともに安南国との貿易を行い、山城（京都）の大堰川、高瀬川を私財を投じて開削した。
また江戸幕府の命令により富士川、天竜川、庄内川などの開削を行った。地元京都では商人としてよりも琵琶湖疏水の設計者である田辺朔郎と共に「水運の父」として有名である。

行基
六六八年～七五〇年
狭山市

行基集団を形成し、道場や寺院を四九院、溜池十五窪、溝と堀九筋、架橋六所、国家機関と朝廷が定めそれ以外の直接の民衆への仏教の布教活動を禁じた時代に、禁を破り畿内（近畿）を中心に民衆や豪族など階層を問わず困窮者のための布施屋九所等の設立など数々の社会事業を各地で成し遂げた。

沖野忠雄
一八五一年～九二二年
大阪市

明治六年、三〇歳のときに、日本政府に雇われて来日し日本の近代化のためインフラ整備を指導しました。
淀川水系の調査・設計を手始めに、鳥取県千代川、東京都江戸川、千葉県利根川、新潟県信濃川、山形県最上川、赤川などで改修工事の指導、設計に当たりました。
このほか坂井港のエッセル堤などの設計も行いました。

ジョージ・アーノルド・エッセル
一八四三年～一九三九年
大阪市

かかわった改修工事は、港が八〇、河川が一〇〇にも及び「治水の神様」と称された。内務省直轄事業の基礎を築き、「内務省直轄事業の父」「明治河川改修の父」などと称された。
なかでも、近代日本の治水の歴史に燦然と輝くのが淀川改良工事であるといわれ、「新淀川の父」とも称される。

仁徳天皇
二九〇年～三九九年
大阪市

河内平野における水害を防ぎまた開発を行うため難波の堀江の開削と茨田堤（大阪府寝屋川市）の築造を行った。
これが日本最初の大規模土木事業だったとされる。
又、山背の栗隈県（京都府城陽市西北ノ久世郡久御山町）に灌漑用水を引かせた。そして、灌漑用水として感玖大溝を掘削し広大な田地を開拓した。

豊臣秀吉
一五三七年～一五九八年
枚方市

豊臣秀吉は織田信長の家臣として台頭し土木技術を巧みに活かした戦法、築城を得意とし様々な土木施設を手がけた人物です。大阪城築城では周辺地域の新田開発と洪水防御のため淀川に太閤堤や文禄堤等を築き淀川の流路を固定、これ以外にも多くの治水事業等に携わり土木技術を飛躍的に発展・普及させました。

中甚平衛
一六三九年～一七三〇年
東大阪市

「大阪の川の流れを変えた男」と呼ばれる。五〇年にもわたり大和川の付け替え工事を嘆願し続ける。付け替え工事では指揮を任せられ、工事は長さ一四キロメートルの新しい川を造ることになる。この工事により川の水を海まで直接通すことが可能となり、水かさが少なくなり、水害を減らすことができた。

三重県

西嶋八兵衛
一五九六年～一六八〇年
津市

西嶋八兵衛は、遠州浜松で生まれ、水利、土木、経済、書道に優れ一七歳の時に伊勢津藩主藤堂高虎に仕えました。八兵衛は二代目藩主藤堂高次から命ぜられ領内を巡回、雲出井用水開削の大工事に着手しました。
雲出井用水路は、現在の津市、久居市の優良農地約八〇〇ヘクタールを灌漑する農業用水利施設。

恵荘上人
一七七八年～一八四九年
長浜市

高月町西野は北と西を山に囲まれた低地でよく洪水が起きていました。恵荘はこの洪水を何とかしようと西の山をくり抜いてびわ湖へ排水を流す事を考えていました。
そこで恵荘と住民は彦根藩から「隧道」を掘る許可をもらい、天保一一年より工事をはじめました。
五年後の弘化二年に西野隧道が完成しました。

藤本太郎兵衛
不詳
高島市

大雨が降った際に周辺河川からの水が琵琶湖に集まり水害をおこす。水害をなくすべく、琵琶湖の水位を下げるために瀬田川の川底を深くする工事を行うことになる。
治水工事は瀬田川の全長一四キロメールで行われた。
藤本太郎兵衛は親子三代に渡り私財を投じ尽力した。
天保の御救大浚と呼ばれる。

松本彦平
一八五六年～一九一九年
高島市

土地が高台にあり、周囲の河川から田畑に水を引くこともできない状態であった、そのため貯水池を作る必要にせまられた。松本彦平の指示の下、淡海湖の工事は進められるが完成を見ずに亡くなる。
九年に及ぶ工事で淡海湖は完成し、水の確保ができるようになったため新田開発にもつながる

籠手田安定
一八四〇年～一八九九年
長浜市

県令籠手田安定は、明治一五年に田川改修工事の施行を県会に提案したが、工事費が莫大であり受益範囲が限定的で下流に強い反対があることを理由に議会で否決された。翌明治一六年にも再提案したがまた同一理由で否決された。そこで県令は明治政府の許可を受ければ工事が出来るという規則を発動して工事を実施した。

近藤勝由
一八二七年～一九〇一年
綾部市

洪水により天田井堰が大きな被害を受けました。そこで勝由は天田井堰と綾部井堰を統合しようと考え、約九〇〇メートルの水路を掘り、二つの井堰の水路をつなぐ計画を立てました。困難な工事だと農民から反対されましたが、勝由は私財を投げうって工事に取りかかりました。これにより、綾部用水の基礎が築かれました。

慈心上人（覚真）
二七〇年～二四三年
加茂町

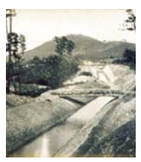
瓶原大井手用水開削の祖。大井手水路は、鎌倉時代中期の貞応元年、現在の京都府相楽郡加茂町瓶原の海住山寺の慈心上人が、和束郷石寺の和束川に水源を求め、川に井手枕という堰堤を設け、そこから、幅一八〇センチ、勾配一二五〇分の一、水深三〇センチ、延長六七五メートルの水路を村人とともに完成させた。

奈良県

中川吉造
不詳
大和高田市

明治二九年、帝国大学工科大学土木工学科卒。内務省技師となり地方土木工事の監督と利根川改修にあたり大正一五年利根川の改修工事を完成させ、約四〇年間、利根川改修工事に尽力した。「利根川の主」と称される。
昭和七年から十一年間を費やし、高田川の付け替え工事や、水道の敷設工事に助力を惜しまなかった。

魚住完治
一八二八年～一八九九年
稲美町



いなみ野台地は雨が少なく、度重なる干ばつが襲い農家は困窮していた。私財を投じて山田川からの疏水を造るため測量を行ったが、地盤が悪く工事費が嵩むため淡河川から取水することとし明治二二年に着工し三年後に完成、七一〇ヘクタールが水田化された。
工事では指導監督にあたり疏水完成に大きく貢献した。

市丸又四郎
不詳
高砂市

加古川支流の荒井川にはさまれ、頻繁に洪水が起きていた。そのため市丸又四郎は堤防を造り荒井川の水害に苦しめられていた人々が救われた。
現在も高砂市美保里には市丸廟の額が掲げられたい市堂が弁天堂と同じ敷地に堂には市丸の事績を記した碑文と「恵光院浄慶」と記された墓碑が納められている。

赤木正雄
一八八七年～一九七一年
豊岡市

全国治水砂防協会の設立者。東京帝国大学農学部林学科砂防に学び、林学出身者ではじめて内務省に就職。
鬼怒川、信濃川、木津川、瀬田川、富士川、神通川、天竜川、六甲山など全国の砂防工事を指揮するなど、国内砂防技術の基礎を築いた。日本での砂防の重要さをいち早く説いた人物で「砂防の父」といわれる。

長浜新六郎
不詳
加古川市

国包出身の商人だった長浜新六朗は、加古川の水害に悩まされ続ける人々を見かね、私財を投じて洪水の際に避難できる山を天保六年（一七五六年）に完成させた。
その山は人の手で築かれたことから築山と呼ばれ、その頂上に地元の人々が感謝の気持ちと安全への祈りを込めて築山神社を建てたといわれている。

和歌山県

大畑才蔵
一六四一年～一七一〇年
橋本市

水を雨水や渓流水に頼る紀の川右岸一帯の農民たちは、紀の川の水を自分の水田に引くことができたらとの願いに工事に取り掛かりました。地形が複雑で難しい工事を他にも完成させた才蔵が作った二四キロメートルの藤崎井用水路や完成はできなかったものの三〇キロメートルの小田井用水路は現在も使われています。

濱口梧陵
一八二〇年～一八八五年
有田郡

安政南海地震の津波が広村に襲来した後、梧陵は自身の田にあった藁に火をつけ高台の広八幡神社への避難路を示す明かりとし村人を誘導した。
村人の九割以上を救い、津波から命を救うには情報伝達の速さに が重要という教訓を残した。これをもとに作られた物語が『稲むらの火』として知られている。

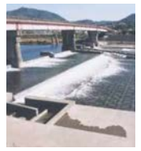
和歌山県

柏木浅右衛門
生年不詳～一八三四年
御坊市

浅右衛門は段々田んぼでの重労働や干ばつに悩み・飢饉に苦しむ人々の生活を見て成長した。彼は東谷に溜め池をと一念発起し、私財一切を投げだし、労力総てを奉仕して池普請に情熱を傾けた。はじめは 半信半疑の村人も彼の姿に励まされ一万有余の人々が、伊勢参宮講を結成して経費をととのえ、大事業に着手した。

栗本新兵衛
不詳
御坊市

天保の大飢饉のために多くの人が飢え死にすることになった。栗本新兵衛は貧しい人を救うために日高川沿岸を埋め立てる工事を私財を投じ行った。人々はこの工事により仕事を得ることもできた。
また、これにより新田が開発できるようになり、新しくできた新田は「栗新新田」と呼ばれる。



鈴木立庵
不詳
御坊市

鈴木立庵は段々田んぼでの重労働や干ばつに悩み・飢饉に苦しむ人々の生活を見て成長した。彼は東谷に溜め池をと一念発起し、私財一切を投げだし、労力総てを奉仕して池普請に情熱を傾けた。はじめは 半信半疑の村人も彼の姿に励まされ一万有余の人々が、伊勢参宮講を結成して経費をととのえ、大事業に着手した。

平井正次
一五八〇年～一六五七年
御坊市

一六〇〇年初めの土木技術では、日高川近辺の低い土地は畑地が多く水田化されておらず、河川が荒れればたちまち氾濫するため流域は耕作人不明の荒地となっていた。正次は川辺町若野以本で日高川を堰き止め、二六〇町歩を灌漑、水門より水末に至る溝渠延長約一里二〇町の若野井堰を設計し工事を指揮し完成した。

亀井 茲矩
一四四〇年～一八九七年
豊田市

茲矩は慶長七年から大井手用水路の開設に取組み、千代川の川筋に取水堰（智頭川と八東川の合流点の上約一キロメートル）を設けて水源とし、水路は河原から江津・秋里・湖山に及ぶ約二〇キロメートル余で千代川の西側には灌漑面積は約千町歩に及びます。
施工には七年の歳月を要したと言われています。

鳥取県

大梶七兵衛
一六二三年～一六八九年
出雲市

海から吹き付ける強い西風に加え、水に恵まれず作物ができないことに心を痛め、私財を投げ出してでもこの地の開拓を成しとげようと決意。用水路を通す砂地の土地は水が地面に吸い込まれるため、川床にむしろを敷き粘土で固め水が漏れないようにした。こうして幅約六メートル、全長約八キロメートルの用水路ができあがった。

周藤彌兵衛
一六五〇年～一七五一年
松江市

宝栄三年、五六歳にして一念発起した周藤彌兵衛は日吉村の剣山を切り抜き、以来四二年間ノミと槌で剣山の硬い岩を切り開くという苦業に立ち向かった。
九七歳にして「日吉切通し」を完成させ、意宇川の流れを変え洪水を繰り返す暴れ川から村を救った。
宝暦二年、一〇三歳で大往生をとげた。

島根県

卜蔵孫三郎
一六九六年～一七一三年
安来市

卜蔵孫三郎は、江戸時代中期、仁多郡から荒島村に移住し、庄屋の協力を取り付けて能義郡目白池で卜蔵新田の開発を行った。沼地であった目白池に十六年の歳月をかけて五ヘクタールの水田に造成、かんな流し工法を使った土砂運搬方法を用いて、優れた土木技術と才能をふるって新田開発を行い生涯を全うした。

清原太兵衛
一七二一年～一七八八年
松江市

度重なる洪水に見舞われていた松江城下と宍道湖周辺の水害対策に湖水を日本海に流し被害を緩和しようと考え、佐陀川を開削。天明五年から全長約一二キロメートルの水路を掘りすすめた結果、宍道湖の水位は一メートル下がり二〇〇ヘクタールの新田を開発。川沿いでは米が増産、海運業も盛んになり藩の財政事情は好転した。

ウィリアム・K・バルトン
一八五六年～一八九九年
松江市

日本の衛生工学・上下水道の父。松江市他二三都市の近代水道を完成させました。バルトンの設計は、実地工事の段階では大幅に変更せざるを得ないものではありましたが、帝都上下水道の基本計画となり、東京、神戸、福岡、岡山などの上下水道の基本調査を担当しました。
凌雲閣の基本設計者としても知られています。

津田永忠
一六四〇年～一七〇七年
岡山市

岡山の城下を流れる旭川は川が浅くたびたび洪水の被害が発生した。また米の取れる量も現在に比べ少なく日照りや洪水により饉もたびたび起こっていた。
旭川の洪水を防ぐため新たな川を掘ることを考案し一六九九年に蕃山の弟子の津田永忠により川の掘削が行われ現在の百間川ができ上がった。

石川善右衛門
一六〇七年～一六七〇年
岡山市

江戸前期の水利土木家。承応三（一六五四）年七月備前各地に大水害が発生藩主池田光政の命を受け被害が激しかった児島郡の救済にあたった。
各地を視察し、旱水害の地児島郡に福林池・森池をはじめ、郡内に三〇〇余の池を造成、旱害の憂いを除いた。
文化三年郡民にて瑜伽山に頌徳の記念碑が建てられた。

ローウェンホルスト・ムルデル
一八四八年～一九〇一年
岡山市

児島湾の干拓調査にあたり、ムルデルはこの地方の伐採で荒れ果てた山々を見て驚きました。
このままでは、土砂流出、洪水の害は治まらず、古田の湿田化も止められないとし「児島湾開墾復命書」のなかで、干拓工事の手順や工法だけでなく、伐採の禁止と河川上流部での砂防の必要性を強く説きました。

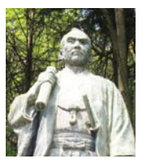
河原善右衛門
一六三七年～一六八五年
久米南町

江戸時代の寛永八年（一六三一年）に、現在の久米南町下弓削に生まれ、長じて大庄屋となり貧困に苦しむ農民を何とか救済したいと発念。
干天の水不足、洪水など、天候に翻弄される郷土の農業改革を目指して、河川の改修、田畑の開墾・灌漑施設づくりなど、数々の大事業に私財を投じて成し遂げた。

香川県

久米通賢
一七八〇年～一八四一年
東かがわ市

財政難に陥っていた高松藩の第九代藩主松平頼恕は、通賢の才能を見込み財政再建策を頼った。
通賢は阿野郡坂出の浜に新たな塩田開発を進言。高松藩はこの案を採用し通賢は塩田開発の陣頭指揮を執るだけでなく、自ら率先して作業に参加した。藩の財政難により資金が滞ったため、私財を投入し工事を継続させた。



藤川三渓
一八一七年～一八八九年
高松市

讃岐の国山田郡三谷村（高松市三谷町）に生まれ、幕末から明治時代の医師であり、水産開発者として功績を残した。維新後は捕鯨の事業化を計画し、開洋社を設立。奥羽征討軍監察使として功を立て、明治一四年に公務を退職した。また東京に大日本水産学校、大阪に大阪水産学校を創立するなど、水産事業に生涯を捧げた。

加地茂治郎
一八六九年～一九四〇年
観音寺市

大正一三年、香川県は厳しい日照りに襲われた。元々雨が少なく、昔からため池をつくって作物を作っていたが、日照で池は枯れ、農民たちは飲み水にも困るほどだった。
農民の訴えに柞田川をせき止める多ム建設を計画。国や県議会に費用負担を交渉し、貧しい農民の収入となるよう工事は地元の農民たちで行った。

空海
七七四年～八三五年
善通寺市

僧侶としてだけでなく、建築や治水など実利の面でも高い能力を示した。その中で最も大きな功績が讃岐の国にある満濃池。この池は国内最大級のため池で、当時からこの地域では農業用水に活用されていたが、大雨などにより度々決壊し甚大な被害を出していた。
空海はこの池にアーチ状の堤防を築き氾濫を防いだ。

岡山県

山口玄洞
一八六三年～一九三七年
尾道市

関西や尾道の公共事業や慈善事業、寺社に多くの寄付をした。大正から昭和における寄付金王とまで言われている。記録に残る主なものだけでも一四七件におよぶ寄付・寄進をしている。
初期は特に教育関係、ついで病院・水道などの社会事業関係、そして災害の義捐関係なども目立った。

桑原卯之助
一七一三年～一七八三年
広島市

関西や尾道の公共事業や慈善事業、寺社に多くの寄付をした。大正から昭和における寄付金王とまで言われている。記録に残る主なものだけでも一四七件におよぶ寄付・寄進をしている。
初期は特に教育関係、ついで病院・水道などの社会事業関係、そして災害の義捐関係なども目立った。

咽声忠左衛門
一八六三年～一九三七年
尾道市

関西や尾道の公共事業や慈善事業、寺社に多くの寄付をした。大正から昭和における寄付金王とまで言われている。記録に残る主なものだけでも一四七件におよぶ寄付・寄進をしている。
初期は特に教育関係、ついで病院・水道などの社会事業関係、そして災害の義捐関係なども目立った。

水野勝成
一五六四年～一六五一年
福山市

福山藩初代藩主。芦田川デルタ干拓による城下町建設をはじめ、綿花栽培の奨励による繊維産業育成や上水道の敷設、戦国時代以来荒れていた神社仏閣の修理・再建など領内の治政に力を尽くした。城下町建設とともに、上水道網（福山旧水道）を整備。また、城下町を氾濫から守るため、芦田川の治水・灌漑・利水事業も行った。

岩崎想左衛門
一五九八年～一六六一年
周南市

鹿野台地は周辺の錦川や渋川よりも高台にあるため村人たちは毎日遠くへ水汲みに行っていた。これを見た想左衛門重友は、なんとかこの台地に水を引こうと考えた。
そこで、藩の許可を受けた想左衛門重友は（慶安四年）私財を投じて村人と工事を始めた　工事を始めて四年後、村人と協力し約九〇メートルのトンネルが完成した。

井内恭太郎
一八五四年～一九三四年
阿波市

江戸時代から吉野川流域の農地ではたくさんの藍が作られていた。明治三〇年代以降、化学染料の輸入等により藍は急速に衰退。藍にかわりに米作りを考えるも水の確保が困難だった。井内は、吉野川から農地まで水を引く用水路の建設を考え、七年をかけ吉野川の南北に大きな用水路を同時に完成させた。

西嶋八兵衛
一五九六年～一六八〇年
高松市

讃岐平野は降雨が極めて少なく、農民たちは水の確保に苦労してきた。日照りが続くと水不足に困窮し、大雨になると鉄砲水や洪水が民家や田畑を押し流し被害を出すという讃岐において、治水利水事業は急を要していた。
八兵衛は干ばつを救うため讃岐へ派遣され、農業用水確保のため、讃岐のため池の築造・改修に活躍した。

愛媛県

山之内彦左衛門
一六一四年～一六九八年
久万高原町

久万盆地を流れる久万川は深い谷のため、農業用水を引くため川の上流に堰をつくり、そこから数十もの「掛樋」を連ねて水を引いていた。台風や大雨の洪水によって、掛樋はたびたび流されその苦労は大変なものだった。
この苦しみから人々を救うため、掛樋の代わりに岩山を切り開き用水路を築いた。

足立重信
生年不詳～一六一三年
松山市

松山城主　加藤嘉明に仕え、藩きっての土木技術者だった足立重信は、当時あちこちで氾濫していた伊予川（重信川）の河道改修を行い、荒廃地だった地域に五十ヘクタールの新田を拓いた。当時城を作る勝山の南麓を抜け、洪水を繰り返す暴れ川だった石手川（いしてがわ）を南（現在の流路）へ付け替えさた。

高知県

野中兼山
一六一五年～一六六三年
高知市

八田堰、山田堰などの堰及び用水路の建設による新田開発や日本最初の掘り込み港湾「手結内港」など多くの新田開発や港湾設備建設を行い、「土木神の化身」と呼ばれるほどの土木工事を行った。四万十川支流に分水目的の井堰を設け、四ヶ村を灌漑するために水車を設置し水田に水を汲み上げる工事も行った。

福岡県

古賀百工
一七一八年～一七九八年
朝倉市

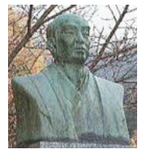
高山六右衛門
生年不詳～一七二四年
久留米市

田中吉政
一五四八年～一六〇九年
柳川市

高橋庄蔵
一八二六年～一八九一年
豊前市

長卯平
一七五九年～一八二七年
筑前町

草野又六
一六七八年～一七三三年
大刀洗町



田代弥三左衛門
一六八六年～一六八七年
うきは市

日照りが続くと稲も立ち枯れ、作物も取れず何度も飢饉に陥る地域を救うため筑後川からの豊富な水を引くための用水工事が行われ、翌年には水田を潤す堀川用水が完成した。その後拡張を藩に願い出し認められ筑後川本流山田堰の大改修を実現。根本的に水害干害から住民を守り農民に大きな恩恵を与えた。

大干ばつによってたびたび農作物が全滅していた久留米の水不足を解消するため、筑後川北岸の床島に堰を築くことを久留米藩に請願するとともに郡内の庄屋からの協力も得、久留米藩士草野又六の指揮のもとで工事に着工し、正徳四年に床島堰を完成させた。床島堰によって田畑約二千ヘクタールを潤した。

江戸時代の筑後国主。筑後川沿岸住民は洪水により荒野になってしまうのが悩みだった。筑後川河畔にある草野を開拓し耕地の拡張を命じ、自らも海岸理立を企画し、汐土居の築堤に着手した。また、筑後川の流れを深くし舟運の便をはかった。さらに国内各所の城壁を撤去し田畑にしたといわれている。

天保七年上尾郡路土村（現在の豊前市黒土）で代々庄屋を務める家系に生まれた。明治六年からは上毛・下毛二郡の大区長をつとめた。明治一一年に灌漑用の矢万池の築造を計画した庄蔵は、一〇年の歳月をかけて水利土工会を創立。私財を投じ明治二一年に着工したが三年後に五六歳で急死、池はその一〇年後に完成した。

江戸時代に戸原村の大庄屋を務め、水利に恵まれない郡の中央部に山を掘り抜きく灌漑水路、新大間池仕掛水路を作ることを計画し、同地出身の博多の豪商からの援助をうけるだけでなく、私財も投じて七年で完成させた。地域に大きく貢献した長卯平の偉業は今も生活に恩恵を与え続けている。

土木工事の技術にすぐれ、久留米藩士にとりたてられる。筑後川北岸地区の三井郡一帯の土地は川面より高く水田として利用されず、わずかな田畑もたびたび干害に襲われ、農民は飢饉に迫られる状態であった。床島堰と恵利堰の建設工事を指揮して正徳四年完成させ新田約四〇〇ヘクタールをひらいた。

筑後生葉郡吉井村の大庄屋。郡東部の荒れ地に筑後川の水をひく用水路の開削を計画し、寛文一二年久留米藩の援助をえて工事を開始。久留米藩より借りた三三貫目を使い果たし九貫目ほどに手を出し、思うほど水量が無かった為更に数十貫目の私財を投げうつなどして延宝四年袋野堰の通水に成功した。

熊本県

櫻井又吉
一七五八年～一八三〇年
玉名市

江戸時代中期から後期の治水家。熊本県玉名郡弥富村に生まれた桜井又吉は、若くして役人の道に進み、永徳寺村の庄屋など玉名郡代のもと要職に就いた。優れた土木技術をもとに村々のために働き、自費で堤防強化を行うなどして村人の生活を守った。毎年九月に又吉さんまつりを行い遺徳を偲んでいる。

広瀬久兵衛
一七九〇年～一八七一年
日田市

一八一六年頃、豊後日田地方に天災・地変がつづき、大飢饉が襲った。収穫不良をなんとかしようと村人の協力を得て小ケ瀬井路を完成した。日田の土木工事の後、県北地域の干拓事業を開始、周防灘沿岸の新田と宇佐の広瀬井堰の工事にも関係した久兵衛は、毎日雨の日も風の日も土工と一緒に働いたといわれている。

大分県

内海作兵衛
一六二四年～一七〇六年
宇佐市

幕末から明治にかけて大分県の広瀬井手、高森水路を開発。その後明治政府の水利開墾事業に従事し全国の水利土木工事にあたった。特に日本三大疏水とされる安積疏水、琵琶湖疏水、那須疏水の開発に取り組んでいる。疏水工事のなかで特にトンネル工事で経験を積みこの経験を生かして後にトンネル工事専門会社を創設した。

藤江監物
一六八七～一七三年
延岡市

江戸時代の中頃、農民たちは水が少なく貧しい暮らしをしていた。延岡藩家老藤江監物は、一七二四年、水田へ水を引くために五ケ瀬川に井堰を造るよう命じた。一七三一年に、家臣の策略により親子四人が投獄され、その四ヶ月後に亡くなったが、亡くなってから三年後に岩熊井堰が完成。農民たちは水不足から救われた。

坂元源兵衛
一六四〇年～一九一八年
都城市

農業用水が無く水田がない関之尾の人々から懇願され、庄内川の関之尾滝上流から水を引くため、ノミと槌だけで岩を掘り抜き約一〇年の苦難の末、一八九六年に北前用水路を完成させた。この用水路は、自然の落差を利用した取水口や落差工（女滝、余水吐（男滝）など坂本の高い技術力により完成した。

宮田盛儀
一八七六年～一九六三年
三股町

用水路開発による村勢の振興に意を注ぎ一九〇五年沖水川から水路を引き長田地区に七町歩の水田を開いた。当時の農村では水田を増やすことが最も重要であった。次いで天木野地区に用水路を開発し二〇町歩の水田をさらに轟木地区に六町歩の水田を開き、水田稲作が可能となり耕地の生産力が高まり村の生活も豊かになった。

田丸貞重
一八七五年～一九三一年
小林市

昭和初期に野尻町で行われた開田事業があります。須木から水を引いた漆野原開田事業と小林から水を引いた野尻の農業に変革をもたらした。これらの工事は水不足に苦しんでいた野尻原開田事業。田丸貞重は三ケ野山から東麓にかかる野尻原開田事業に、私財を投げ打って生涯を捧げました。

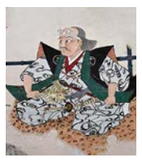
佐賀県

成富茂安
一五六〇年～一六三四年
佐賀市

現在の佐賀市鍋島町に生まれ、堤防、井樋、用水路、ため池など一〇〇数カ所の事業に携わり、利水開発や洪水防止事業を進め、治水の神様と呼ばれた。佐賀平野の嘉瀬川は、洪水や水不足に苦しんでいた。そこで石井堰という施設をつくり洪水を防ぎ、田畑に必要な水量を確保して農作物の収穫を安定させた。

長崎県

深澤儀太夫
一五八四年～一六八二年
波佐見町



当時、九州のまわりの海では鯨が沢山捕れ、儀太夫は捕鯨で大金持ちとなった。そして、捕鯨をして儲けた金で新田や溜池を造って寄付していた。中でも野岳村は雨が降ると川が溢れ、日照りにが続くと水が無くなり作物の被害が頻繁に起こっていた。これを防ため大きな堤を作ろうと考え野岳湖をつくり多くの村人を救った。

倉田次郎右衛門
生年不詳～一七〇二年
長崎市

生活用水や非常時の消火用水の不足に倉田次郎右衛門が私財を投じて水道の敷設工事を行った。寛文三年工事を決意し、寛文七年銭屋川を水源とする水道の敷設工事に着手、延宝元年水道工事完成。二〇〇年余りにわたって長崎の住民に水を供給し続け長崎の生活を支えた。

熊本県

加藤清正
一五六二年～一六一二年
熊本市

秀吉にとりたてられ二六歳の若さで肥後北半国の領主となった清正は、当時暴れ川と呼ばれた白川は、何度も熊本城下を襲っていた。清正は川の上流から河口まで見回り白川の洪水により田畑が大きな被害を受けないよう、堀替えや堰・井出や石刎を作るなど様々な工夫をして田畑を豊かにし、今の熊本の礎を築いた。

布田惟暉
一八〇年～一八七二年
山都町

肥後国矢部に誕生し、養父布田太郎右衛門の土木治水事業の影響をうけ、嘉永七年、阿蘇の外輪山南側の五老ヶ滝川の谷に通潤橋（石造アーチ型の通水橋で国の重要文化財）を完成させるなど、橋・道路を建設し矢部の開発に努めた。それにより天保の大飢饉から農民を救った。一九五二年には、熊本県近代功労者となった。

千々波敬右衛門
不詳
熊本市

江戸時代後期の治水家。熊本県飽田郡に生まれた。水の確保が十分に行えず、たびたび水不足で村人が困っているのを見て、私財を投じて白川下流に大石堰をつくり、掘割をもうけて用水路を築く工事に着手した。水路が完成する前に工事途中で病死したが、明治四年に用水路は完成し村人に恵みを与えた。

富田茂七
一七六〇年～一八三七年
上益城郡

かつて砥川村は、田地に使用する水の確保が困難な立地条件で当時の庄屋であった富田茂七は享和元年赤井の素麺滝から砥川へ水を引くため船野山の山麓をめぐる約三三五〇メートルの水道を開削し荒田を良田へと変えた。この功績を称え大正一四年に富田茂七彰徳碑が建立され、疎水祭を行った三月一九日には水祭が開催されている。

宮崎県

黒木七左衛門
一七九六年～一八七二年
宮崎市

寛政八年、日向（ひゅうが）船引村（現在の宮城県清武町）の庄屋に生まれた。清武川支流の水路改修につとめ、新田を開発した江戸時代後期の治水家で、正手（しょうて）の水路を整備して洪水を防いだ。清武川の清流を引いてつくられたせせらぎは ホタルの名所として知られている。

松井儀長
一五七〇年～一六五七年
宮崎市

満潮時に大淀川が逆流するのを見て清武川の方が水位が高いことに気付き清武川から水を引くことを考えた。当時としては大事業であったこの事業は寛永一六年一二月に普請にとりかかり一九年間の工事で全長は一〇キロメートルにも及んだ。この事業によって農民たちは干ばつから救われただけではなく新開田を促すものとなった。

児玉久右衛門
一六八八年～一七八一年
西都市

穂北郷は水が乏しい地域で、収穫できる米は年貢の一割程度だった。児玉久右衛門は藩から許可を得て、一七二〇年に水路と井堰造りに着手。工事への妨害、洪水による堰の流失などの問題があったが、一七二二年に第一期工事が完成、一七五〇年に第二期工事が完成し、水田約八〇ヘクタール灌漑。後に水田は約六〇〇ヘクタールに達した。

野井倉甚兵衛
一八七四年～一九六〇年
有明町

二十歳頃、干ばつで作物が枯れ、台風で深刻な被害を受けたことから、シラス台地に水を引く事を決意。以来、農林省への陳情や耕地整理組合の設立を行い、戦時体制下でも水路開削や開田工事を続けた。敗戦後、莫大な事業費用にGHQは難色を示したが、陳情を続け事業を続行、六二〇ヘクタールのシラス台地を潤す工事を完成させた。

鹿児島県

馬場藤吉
一八七五年～一九二三年
志布志市

蓬原開田に命をかけて働かれた馬場藤吉は二八歳の時、蓬原に帰って馬場病院を開く。荒れた大地に水を引き生活に苦しむ村民を助けたいと明治四五年に西志布志・大崎連合耕地整理組合を作り組合長になった。そして自分の財産を全て売って水を引く権利を譲り受け、四四歳の時、四三〇ヘクタールの開田に成功した。

沖縄県

蔡温
一六八一年～一七六一年
那覇市

田と畑の転換を禁じ、また傾斜地の開墾を制限する一方で、農民に耕地の永久耕作権を与えて農地の地力保護をはかり、農業用水路の整備を進めた。また、農民を組合に所属させ、納税の連帯責任を負わせることによって農民同士の協力を促すとともに相互監視による税収の安定化をはかった。

全国世界水の偉人覚醒顕彰　嫁ヶ島万燈会

この度の夕日スポットとるぱ地下道に全国世界の水の偉人 172 名の功績を記した幅 18m のパネルは好評につき国際地方都市として松江市内の地下道へ健康環境平和はひとつのモデルとなる
様々な偉人の功績を記したパネル展示の提案をいただきました。

おはようサンデーラジオアーカイブ

北は稚内・網走、南は石垣島まで、全国のコミュティ FM120 局以上を結んで、毎週日曜日の朝 7 時から 2 時間生放送するおはようサンデーダイジェストをご覧いただけます。

2022 年 9 月 25 日
9 月 23 日嫁が島万燈会で
7 色に輝く LED を使用した燈篭で顕彰
太陽ホールで松江市立乃木小学校
「水の偉人」書籍 贈呈式を開催

2022 年 9 月 18 日
水の偉人、周藤彌兵衛翁、バルトン先生について
9 月 23 日（祝）乃木小学校 水の偉人書籍贈呈式・嫁が島万灯会 水の偉人顕彰祭
100 の診療所より、1 本の用水路 中村哲先生が手本とした、福岡県朝倉市山田堰を改築した庄屋・古賀百工翁

2021 年 7 月 11 日
7 月 7 日の島根豪雨災害の様子
全国世界の水の偉人 172 人顕彰碑建立プロジェクト

2021 年 4 月 4 日
バルトン胸像建立リモート除幕式の様子
中村哲さんの功績
バルトン先生の功績

2020 年 12 月 6 日
中村哲さんのアフガニスタンでの功績
全国世界の水の偉人に 172 人目に登録
治水の偉人周藤彌兵衛翁の紹介

2020 年 11 月 29 日
嫁ヶ島万灯会、全国世界水の偉人の紹介
継体天皇と九頭竜川事業
中国経済産業局長賞受賞について

台湾

八田與一
一八八六年～一九四二年
台南市

台湾の嘉南平野は灌漑設備が不十分だったため、十五万ヘクタール程の田畑は干ばつに見舞われていた。そこで與一は官田渓の水を堰き止め、さらに隧道を建設し曾文渓から水を引き込むダム建設を計画し認められた。事業は受益者が官田渓埤圳組合を結成し施行しこの組合付き技師となり完成に至るまで工事を指揮した。

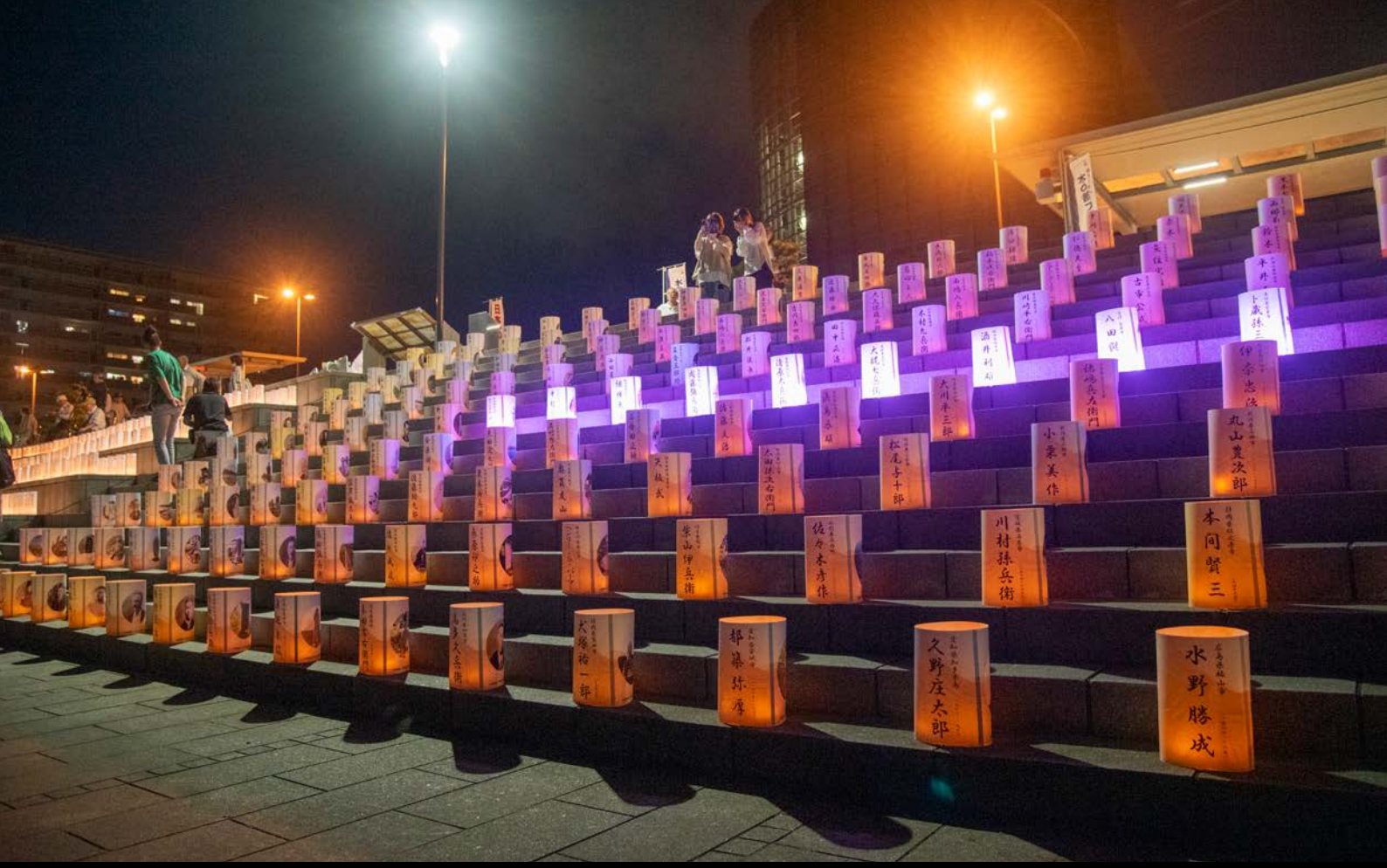
西郷菊次郎
一八六一年～一九二八年
宜蘭市

広井勇博士は防波堤に当たる波の強さを測定し、防波堤に使うコンクリートの性能を試験し、日本初のコンクリート製の外洋防波堤を建設しました。小樽港の成功によって日本の近代港湾の整備が進みました。そのことから、小樽港の防波堤、特に北防波堤は重要文化財と同じくらいの価値を持つと評価されています。

アフガニスタン

中村哲
一九四六年～二〇一九年
ガンベリー砂漠

福岡県福岡市出身の脳神経内科を専門とする医師で、パキスタンやアフガニスタンで医療活動に従事。二〇一〇年、水があれば多くの病気と帰還難民問題を解決できるとして、クナール川からガンベリー砂漠まで総延長二五キロメートルを超える用水路が完成し、約一〇万人の農民が暮らしていける基盤を作る。



全国世界水の偉人と
研究所のあゆみ
[PDF 17MB]

全国世界水の偉人
タペストリー
[PDF 1.6MB]

ダイジェスト動画
[Youtube 9 分 44 秒]

人間自然科学研究所
https://www.hns.gr.jp/

〒 690-0046 島根県松江市乃木福富町 735-188
TEL : 050-3161-2490　　FAX : 050-3161-3846

無断転載禁止
No reproduction or republication without written permission.

ver.20230929 y.kobayashi